

丹波市

稻塚3号窯跡

— (砂) 稲塚川 災害関連緊急砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



平成31(2019)年3月

兵庫県教育委員会

丹波市

稻塚3号窯跡

— (砂) 稲塚川 災害関連緊急砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 31 (2019) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

- 1 本書は、丹波市春日町稻塚に所在する稻塚3号窯跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(砂)稻塚川　災害関連緊急砂防事業に伴うもので、丹波県民局丹波土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移
(発掘作業)
試掘調査　平成27年9月29日～30日
実施機関：兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課
本発掘調査　平成28年5月27日～平成28年7月11日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：池田建設株式会社
(出土品整理作業)
平成29年4月1日～平成30年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成30年4月1日～平成31年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　山田清朝と大本朋弥が担当した。なお、本文の執筆は、第1章・第2章を山田が、第3章・第4章を大本が、それぞれ行った。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。また、東　昭吾氏により報告された土器については、同氏が所蔵している。
- 6 空中写真測量は、株式会社リオプランに委託し、実施した。
- 7 調査成果の測量は、電子基準点青垣・西紀・福知山を基地点とし、GNSS（結合多角方式）で観測・計測し、3級基準点を設置した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
- 8 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 9 遺物写真撮影は、株式会社　地域文化財研究所に委託し、実施した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々からの御指導・ご教示をいただいた。記して感謝する次第です。
東　昭吾・菱田哲郎（京都府立大学）・下山文隆（丹波市教育委員会）・西岡真理（丹波市教育委員会）

目 次

第1章 稲塚窯跡群	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	5
第3節 稲塚窯跡群	11
第2章 調査の経緯	
第1節 調査にいたる経緯	17
第2節 調査の経緯	17
第3節 整理作業	20
第3章 調査の成果	
第1節 概要	21
第2節 遺構と遺物	23
第4章 まとめ	32
第1節 稲塚3号窯出土須恵器	32
第2節 稲塚窯跡群の時期	33
第3節 総括	34

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第21図	稲塚7～9号窯出土土器	16
第2図	分水界(水分かれ公園)	1	第22図	確認調査風景	17
第3図	丹波市	2	第23図	確認調査位置図	17
第4図	旧春日町	3	第24図	工事計画と調査位置	18
第5図	黒井城から見た黒井川流域	3	第25図	確認調査出土土器	19
第6図	黒井城天守台	3	第26図	えん堤竣工状況と稲塚3号窯跡(右端) 南から	19
第7図	稲塚3号窯跡の位置	4	第27図	現地説明会	19
第8図	主要周辺遺跡	5	第28図	調査風景	21
第9図	古代の丹波	8	第29図	平面図	21
第10図	稲塚古窯跡群周辺の生産窯	9	第30図	窯体内土層断面	22
第11図	三ツ塚廃寺跡	9	第31図	窯跡の検出作業	22
第12図	黒井城から見た稲塚窯跡群遠景	11	第32図	窯体内遺物検出作業	23
第13図	旧稲塚村字限図	12	第33図	窯体内 遺物出土位置図・横断図	24
第14図	主要小字現地比定図	13	第34図	出土遺物(1)	25
第15図	稲塚窯跡群	14	第35図	出土遺物(2)	27
第16図	稲塚1号窯跡	14	第36図	出土銭	29
第17図	稲塚1号窯・4号窯出土土器	15	第37図	稲塚3号窯出土須恵器の器種組成	32
第18図	4号窯跡 土器散布状況	15	第38図	出土須恵器の法量比較	32
第19図	5号窯跡 土器散布状況	15	第39図	稲塚窯跡群の変遷	33
第20図	稲塚5号窯出土土器	16			

表 目 次

第1表 主要周辺遺跡	6	第3表 出土遺物観察表(2)	30・31
第2表 出土遺物観察表(1)	28・29		

写真図版目次

写真図版1 遺跡

- 遺跡遠景 南西から
稲塚3号窯跡遠景 西から

写真図版2 稲塚3号窯跡

- 調査前全景 西から
全景 北西から

写真図版3 稲塚3号窯跡

- 全景 南西から
窯体内遺物出土状況 西から

写真図版4 稲塚3号窯跡

- 窯体全景 西から
窯体全景 南から

写真図版5 稲塚3号窯跡

- 窯体断面 西から
窯体断面 西から

写真図版6 出土遺物

- 稲塚3号窯跡出土遺物

写真図版7 出土遺物

- 稲塚4号窯表採土器(3・4)
稲塚5号窯表採土器(8・14~16)
稲塚7号窯表採土器(18)
稲塚8号窯表採土器(19)
稲塚9号窯表採土器(20)
確認調査出土土器(21・22)

写真図版8 出土遺物

- 確認調査出土土器(23~25)
3号窯 窯体内出土土器(28・29・32~36・38)

写真図版9 出土遺物

- 3号窯 窯体内出土土器(39・43~46・48・49)

写真図版10 出土遺物

- 3号窯 窯体内出土土器(50~55)
3号窯 表土層出土土器(60・61・64・65)

写真図版11 出土遺物

- 3号窯 表土層出土土器(56・66~68・73~79)

第1章 稲塚窯跡群

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

稻塚3号窯を含む稻塚窯跡群は、丹波市に所在する。丹波市は、兵庫県の北東部に位置し（第1図）、北西側を朝来市と、北側から東側にかけてを京都府福知山市と、南東側を篠山市と、南側を西脇市と、西側を多可郡多可町と、それぞれ境をなしている（第3図）。丹波市は、平成16年11月1日に、青垣町・水上町・柏原町・春日町・市島町が合併し、新たにできた市である。市域の面積は493.28km²と兵庫県下で5番目の広さで、平成30年5月末あたりの人口は約6万5千人である。

稻塚窯跡群は、合併前の旧春日町に位置する（第3図）。旧春日町は丹波市の東部南側に位置し、旧市島町の南側、旧水上町の東側にあたる。また、南側から南東側にかけては篠山市と、北東側は福知山市と境をなしている。旧春日町は、黒井川と竹田川によって形成された谷底平野とその周囲の山地からなる（第4図）。面積の半分以上は山地で占められている。特に、南側は急峻な多紀連山が連なっている。また、多紀連山の北側裾部は麓削面となっており、多くの集落が形成されている。

黒井川は加古川水系との分水界をなす丹波市水上町石生を源とし（第3図）、北流後東流しその後七日市で北流し、多田で竹田川と合流している。竹田川は、篠山市栗柄を源とし、西流した後国領で北方に向きを変え、多田を経て旧市島町域を北流し、京都府福知山市で土師川を経て由良川と合流し、日本海へと注いでいる。

一方、同じ丹波市域でも、旧青垣町・旧水上町・旧柏原町・旧山南町は加古川流域にあたり、旧市島町と旧春日町とは好対照をなしている。ただし、両者の境をなす分水界（丹波市水上町石生：第2図）は、標高90mと日本一低い分水界で、地形的な障壁とはなっていない。

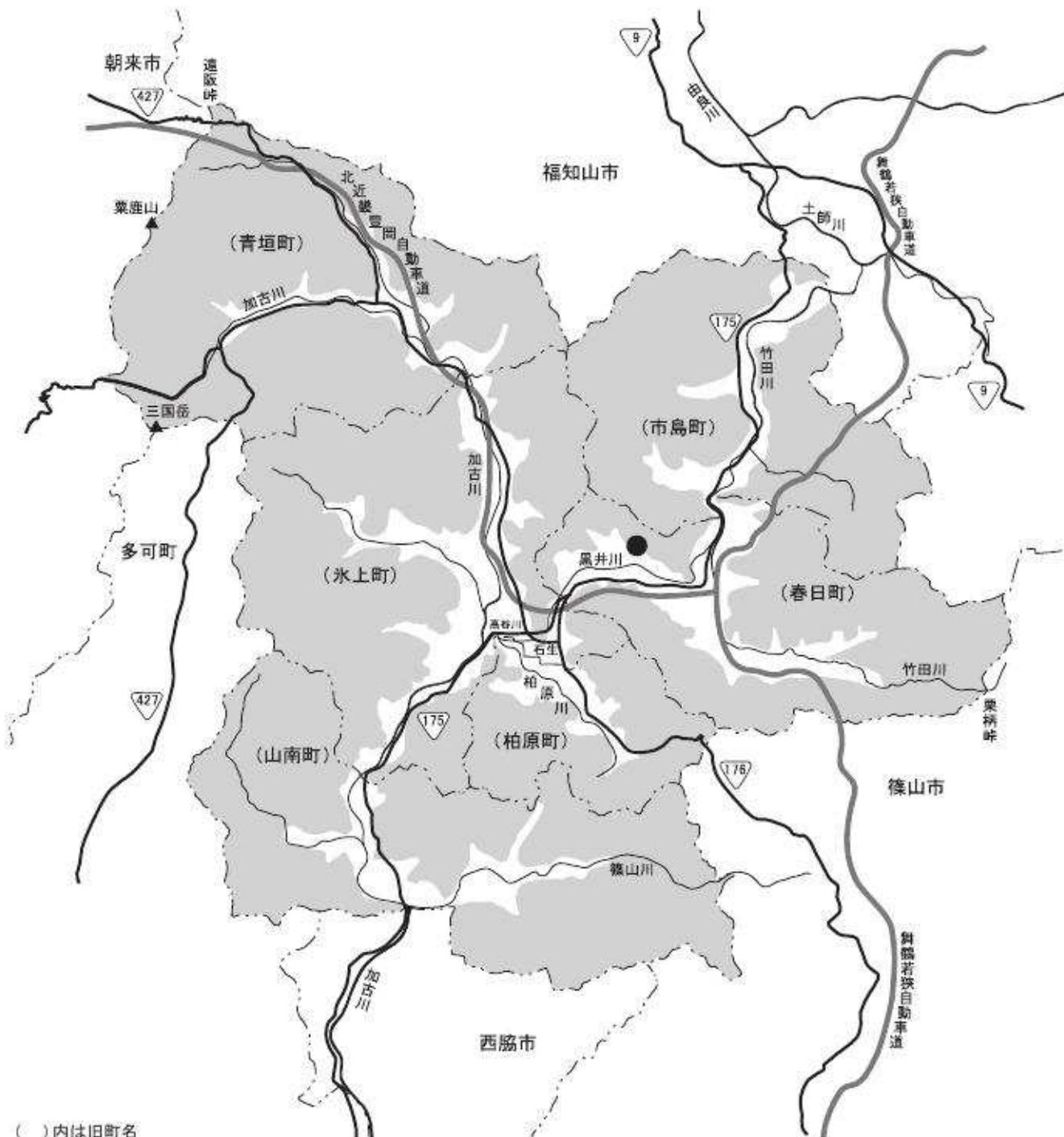
黒井川上流部と竹田川下流部は地形的に開けており、交通路としては最適な地形環境にある（第3図）。このため、黒井川から竹田川



第1図 遺跡の位置



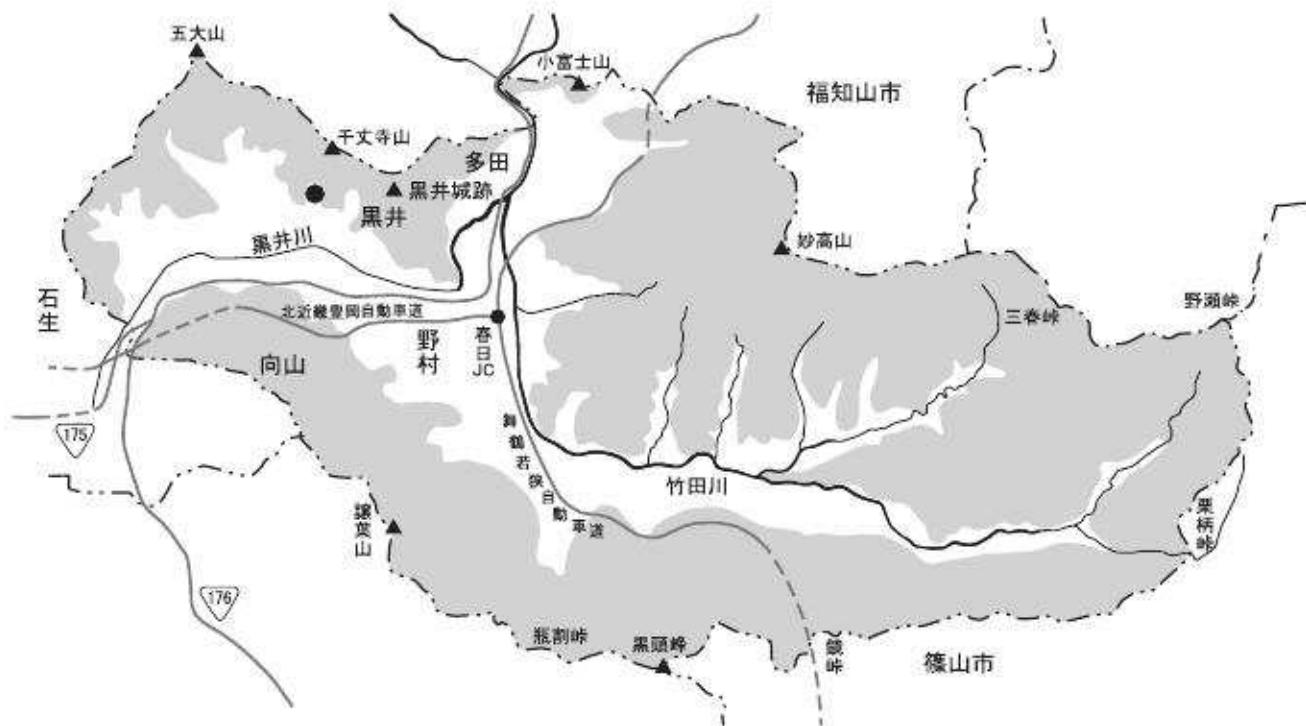
第2図 分水界（水分かれ公園）



第3図 丹波市

に沿うように国道175号線が通っている。国道175号線は、明石市和坂で国道2号線から分岐し、ほぼ北進し、福知山で国道9号線に接続している。また、昭和63年には近畿地方中部と若狭地方を結ぶ若狭道(中国道吉川JTC - 福知山IC間)が開通し、旧春日町中央部を南北に貫いている。平成6年以降は、中央部の春日ジャンクションから西方に北近畿豊岡自動車道が但馬地方へと延び、交通の要衝となっている。

このような交通路としての機能は、弥生時代まで遡ることができる。「加古川・由良川の道」と称され、古くから瀬戸内と日本海側を結ぶ良好なルートであった。⁽²⁾さらに、旧春日町北西部の城山には赤松貞範により黒井城が築造され⁽³⁾、その南麓に城下町が形成され、以後の旧春日町の基礎となっている。そして、稲塚窯跡群が所在するのは黒井城の南西裾部にあたる(第4図)。



第4図 旧春日町

2. 地形的環境

稻塚窯跡群の所在する丹波市は、大半が山地で占められている。山地以外は、河川を中心に谷底平野が開けている。旧山南町域を除く山地の大半は丹波帶地層群からなる。また、山地裾部は扇状地地形となっている。旧春日町の地形環境も、丹波市域の特徴とほぼ同じである。

稻塚窯跡群は、上記丹波高地層群の一部である千丈寺山（標高346m）山麓部に立地する（写真図版1・第4図）。千丈寺山の南側裾部は、黒井川左岸に位置し、黒井川により形成された谷底平野に向かって小さな尾根が幾筋か派生している。そして、小尾根に挟まれた一帯は小規模な谷となっていて、このような小規模な谷の一つに、稻塚窯跡群が所在する。谷の中心を稻塚川が南方に流れ、その東側斜面に稻塚3号窯跡がある（第7図）。

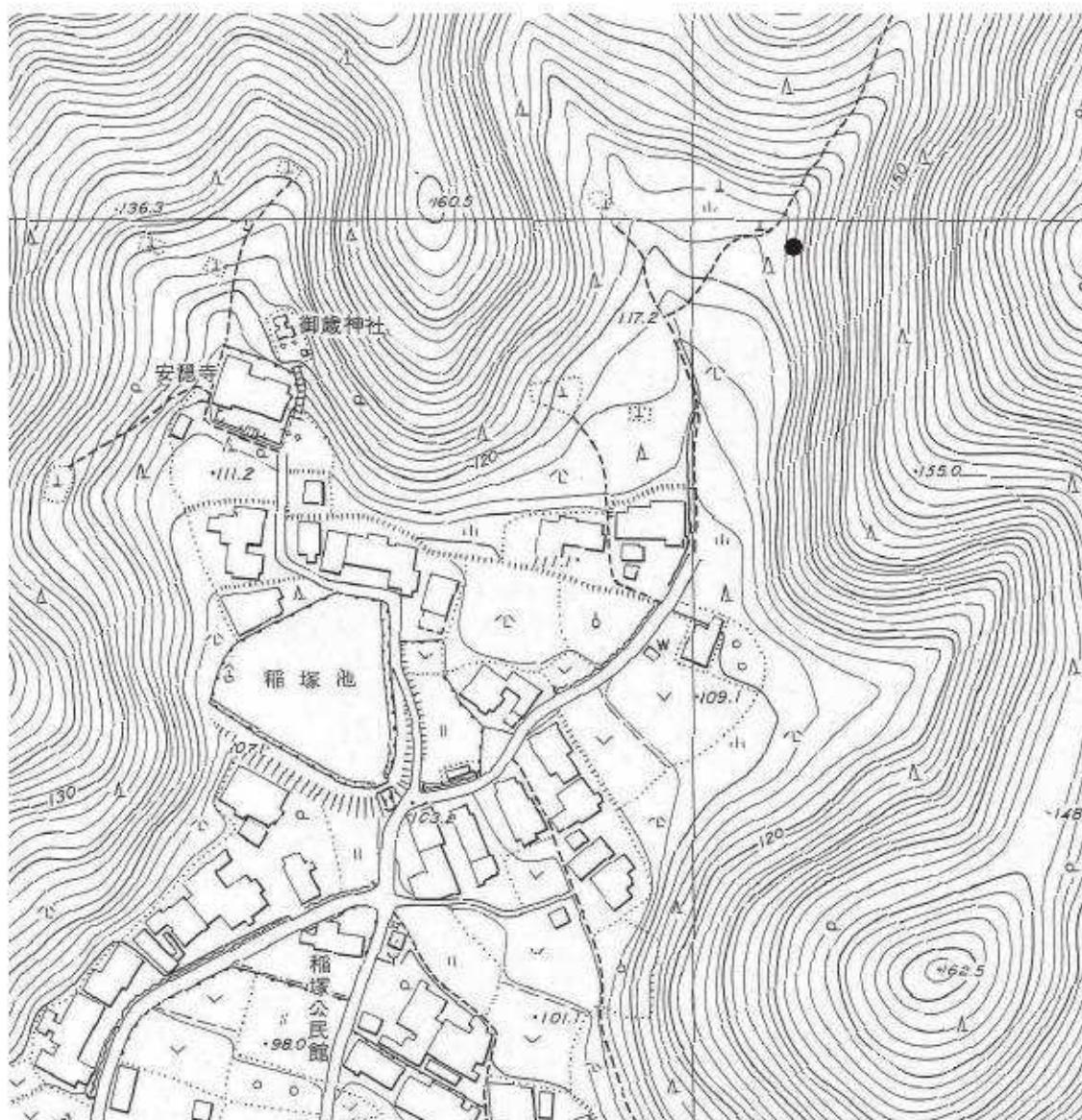
また、谷の南側は小扇状地が形成されている。山地については、稲塚窯跡群は基本的には丹波帶地層群の頁岩・砂岩の互層からなるが、付近ではチャートの露頭も認められる。



第5図 黒井城から見た黒井川流域



第6図 黒井城天守台



第7図 稲塚3号窯跡の位置

[註]

- (1) 田中真吾・野村亮太郎・井上 茂「兵庫県・多紀連山地域の麓層面」『地理学評論』59 1986
- (2) 佐原 真「大和川と淀川」「古代の日本5 近畿」角川書店 1970
- (3) 兵庫県教育委員会「兵庫県の中世城館・莊園遺跡－兵庫県中世城館・莊園遺跡緊急調査報告－」1982
- (4) 兵庫県土地質図編纂委員会「兵庫の地質－兵庫県地質図解説書・地質編－」2003
- (5) 前掲(4)

第2節 歷史的環境

1. はじめに

当節では、稻塚窯跡群が創業された飛鳥時代を中心に、古墳時代から奈良時代の遺跡について概観する。地域的には、稻塚窯跡群が所在する旧春日町域のなかでも、稻塚窯跡群が所在する城山南側裾部と南側の多紀連山（向山～譲葉山）北側裾部にかけての範囲を対象とする。対象とする時期の遺跡が集中していることと、地理的に一つの単位をなしていると考えられることが大きな理由である。



第8図 主要周辺遺跡

2. 古墳時代

当該地において、前期まで遡る古墳は知られていない。時期の明らかにできる古墳は、いずれも後期以降に位置付けられるものである。このなかで注目されるのが、当該地において唯一の前方後円墳である稲塚大塚古墳(10)と、初期横穴式石室を主体とする山田大山古墳群(3)である。

第1表 主要周辺遺跡

	遺 跡 名	遺跡番号	所 在 地
1	稲塚窯跡群	790043・790044	春日町稲塚字安穏寺
2	山田樹源寺東古墳群	790027・790154	春日町山田
3	山田大山古墳群	790029	春日町山田
4	山田井上古墳	790030	春日町山田
5	大野氏亀山上古墳群	790039・790156・790157	春日町古河字氏亀
6	大野古墳	790038	春日町古河字氏亀
7	氏亀古墳群	790040・790158・790159	春日町稲塚字小屋谷
8	大野小屋谷古墳	790041	春日町古河字氏亀
9	古河古墳群	790045・790160	春日町古河
10	稲塚大塚古墳	790046	春日町稲塚
11	稲塚足立古墳	790048	春日町稲塚
12	稲塚波多野古墳	790049	春日町稲塚
13	稲塚松嶋古墳	790047	春日町稲塚
14	氷農古墳	790051	春日町黒井
15	兵主古墳	790050	春日町黒井
16	くど(竈)古墳	790055	春日町黒井字上丸
17	多田古墳群	790062・790182	春日町多田
18	多田北古墳	790063	春日町多田
19	多田南古墳	790065	春日町多田
20	多田遺跡	790064	春日町多田
21	朝日遺跡	790033	春日町朝日
22	朝日八幡山古墳群	790034・790155	春日町朝日字八幡山
23	平松古墳群	790058・790161～790165	春日町平松
24	平松八幡神社裏窯跡群	790217～790222	春日町平松
25	平松片山古墳	790057	春日町平松字片山
26	平松遺跡	790056	春日町平松
27	火山古墳群	790059・790166～790177	春日町平松字火山
28	西野々古墳群	790060・790179～790181	春日町野村字西野々
29	下野村遺跡	790224	春日町野村
30	野村南遺跡	790095	春日町野村
31	七日市遺跡	790069	春日町七日市
32	山垣遺跡	790071	春日町棚原字山垣
33	野村遺跡	790094	春日町野村
34	棚原古墳群	790096・790211	春日町棚原
35	六ツ塚古墳群	790097・790212～790216	春日町野村字睦塚
36	棚原遺跡	790098	春日町棚原
37	棚原桜塚古墳	790100	春日町棚原
38	巖墓古墳	790101	春日町棚原字南

特に、稲塚大塚古墳については、稲塚窯跡群が所在する山地斜面に囲まれた小扇状地の先端部に位置する。稲塚3号窯跡とは、直線で約100mの距離である。稲塚窯跡群成立の基盤を考えるうえで、重要な位置を占めるものと考えられる。しかし、稲塚大塚古墳については、現在は消滅している。ただし、1883(明治16)年・1912年(明治45年)・1913年(大正2)年の3回にわたり調査が行われ、東京国立博物館に出土資料が伝えられている。その内容は、須恵器(横瓶・平瓶・翫・杯・蓋)・耳環・勾玉・管玉・水晶製切子玉・土製丸玉・馬具片・鉄器一括等である。そして、須恵器の特徴から7世紀前半代に位置付けられている。⁽¹⁾

この他、稲塚大塚古墳の周辺に稲塚足立古墳(11)・稲塚波多野古墳(12)・稲塚松嶋古墳(13)が周知されており、いずれも径5mの円墳とされている。これ以上の詳細は不明であるが、稲塚大塚古墳の陪塚的性格をもった古墳と考えられている。

山田大山古墳群については、平成26年度に3基(2号墳・5号墳・6号墳)の調査が行われ、調査報告書が刊行されている。それによると、最も古い5号墳は6世紀前葉に築造された導入期の横穴式石室と位置付けられている。当地における先進性を伺うことができる。

この他、稲塚窯跡群周辺では、大野氏亀山古墳群(5)・氏亀古墳群(7)・水農古墳(14)等が周知されており、横穴式石室を埋葬施設としていることが明らかとなっている。詳細な時期等は不明であるが、少なくとも6世紀以降と考えられる。

また、黒井川を挟んだ南側の多紀連山北麓においても、いくつかの古墳群が周知されている。このうち、火山古墳群(27)については13基の古墳が調査され、TK23期からTK217期まで築造された、木棺直葬および横穴式石室を埋葬主体とした古墳群であることが明らかとなっている。このなかで、10号墳においては竪穴系横口式石室を埋葬施設としており、外来要素の導入が認められる。石室導入以後の時期については、稲塚窯跡群の操業期(後述:次節)と重複するものである。

また、平松片山古墳(25)においても調査が行われ、6世紀末の横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが明らかとなっている。⁽¹⁵⁾

当該地区では、平松古墳群(23)においても石材の散在が認められ、横穴式石室が想定される。したがって、6世紀後半以降の時期が考えられる。

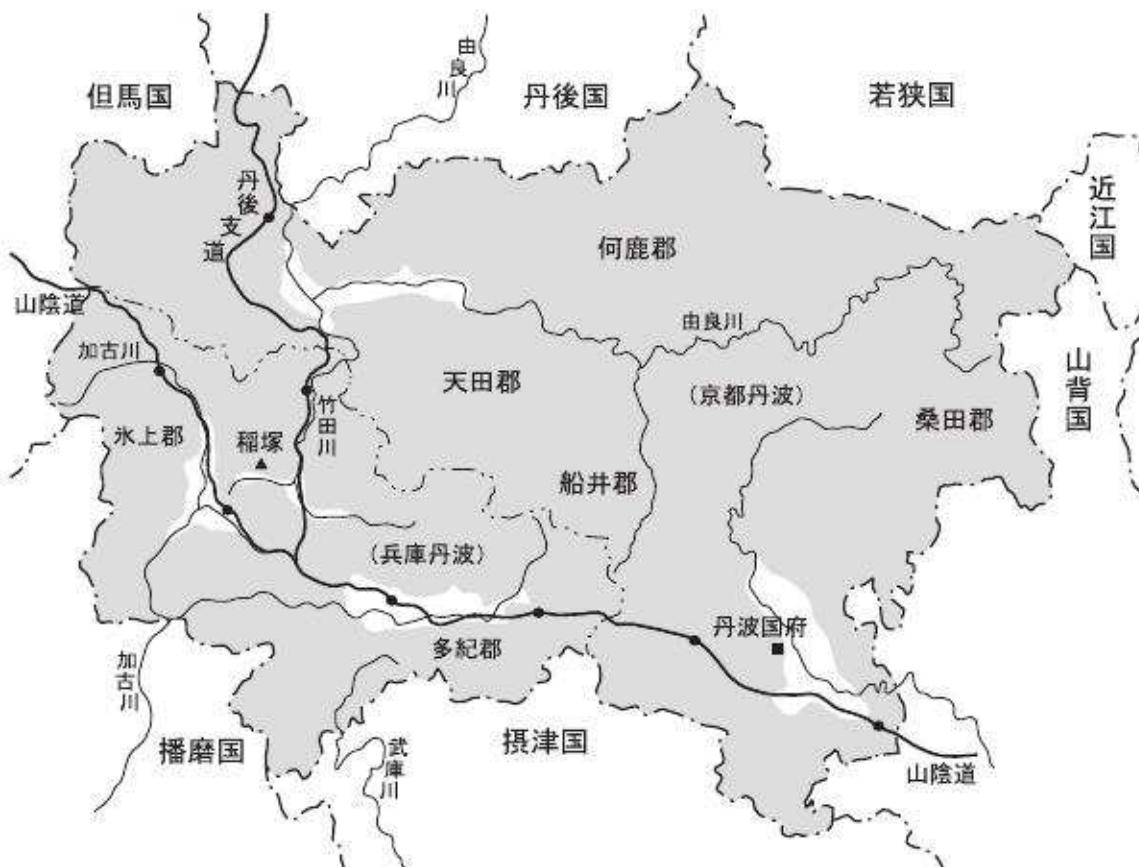
この他、多田古墳群(17)・多田北古墳(18)でも、石材の散在が確認されている。

以上、当該地区の古墳については、稲塚窯跡群の操業期間が飛鳥IV~Vであることを考えると(次節)、稲塚窯跡群の操業期直前あるいは時期的に一致する可能性も考えられる。したがって、当地には、当時における先進性が認められ、これが稲塚窯跡群操業の下地となった可能性も考えられる。

3. 奈良時代

稲塚窯跡群の所在する丹波市は、その名の通り、古代においては丹波国に属していた(第9図)。和銅6年(713)に丹波国の5郡を割いて丹後国を置いて以来、「丹波国」の範囲が確定している。北側が丹後国・若狭国、東側が山背国、南側が摂津国、西側南半が播磨国、西側北半が但馬国と、それぞれ境をなしている。また、古代の丹波国は、現在の行政区画では兵庫県と京都府にまたがり、前者を「兵庫丹波」、後者を「京都丹波」と称している。「兵庫丹波」は多紀郡と水上郡からなり、「京都丹波」は何鹿郡・天田郡・船井郡・桑田郡からなる。

この丹波国の南部から西部にかけて、桑田郡・多紀郡・水上郡を古代山陰道が通っていた。さらに、



第9図 古代の丹波

多紀郡と氷上郡境から丹後支道が分岐し、北上して丹後国与謝郡（宮津）に至っている。この山陰道と丹後支道に挟まれた地域に、稲塚窯跡群が所在する。地形的にみて、どちらの古道への接続も可能である。

稲塚窯跡群は氷上郡に属し、その南部に位置する。氷上郡は、加古川水系と由良川水系からなるが（第1章第1節）、稲塚窯跡群の所在地は由良川水系にあたる。この時期、由良川水系においては、鴨庄古窯跡群が知られている（第10図）。しかし、由良川水系上流域の黒井川流域においては、稲塚窯跡群と時期的に一致する、あるいは後続する窯跡は知られていない。その代り、稲塚窯跡群産の製品の消費地の候補となりうる遺跡が明らかとなっている。それが、七日市遺跡（31）と山垣遺跡（32）である。いずれも、若狭自動車道建設に先立ち本発掘調査が行われ、調査報告書も刊行されている。⁽⁶⁾⁻⁽⁸⁾

七日市遺跡は、旧石器時代・弥生時代・古代の複合遺跡であり、各時代とも当地において重要な位置を占めていたことが明らかとなっている。このなかで、古代に関しては、7世紀後半から10世紀にかけての遺構が検出されている。主な遺構としては、多くの掘立柱建物跡や道路遺構・井戸などである。また、「春部郷」と書かれた墨書き土器や施釉陶器・石器の出土などから、「郷家」のような地方官衙遺跡である可能性が高いと指摘されている。その後、「郡衙別院」との考えが示されている。さらに注目されるのが、「七日市Ⅱ期」が7世紀第4四半期に位置付けられている点である。この時期は、本書で報告する稲塚3号窯跡と並行する時期にあたり、消費地の有力な候補となり得るものである。

山垣遺跡では、コ字形にめぐる濠状の溝とその内部施設（掘立柱建物）が明らかとなっている。出土土器から「飛鳥IV後半から平城I」の間に位置付けられ、濠内から出土した木簡等から「里長」関連の施設と考えられている。⁽⁹⁾ 七日市遺跡と時期的に一致することから、本遺跡についても稲塚3号窯跡との関連が考えられる。



第10図 稲塚古窯跡群周辺の生産窯

最後に、周辺の生産窯についてみておきたい。水上郡内において、当該期の生産窯が周知されている主要な地域は、旧春日町と旧市島町である（第10図）。先述したように稻塚窯跡群の周辺においては、周知の窯跡群は認められない。最も近い生産窯としては、稻塚窯跡群の東約3kmに所在する野上野古窯跡群である。七日市遺跡の東約1kmの位置にあたる。詳細は不明であるが、1基は瓦と須恵器の瓦陶兼業窯で、古代に位置付けられている。

そして、当該地域で最も知られているのが、鴨庄古窯跡群である。旧市島町東部、鴨庄川流域で操業された古窯跡群で、小谷を単位とした5つの支群（上垣支群・岩戸支群・上牧支群・北奥支群・南支群）の84基以上からなる。このなかで、南支群と上垣支群と天神瓦窯跡は、稻塚窯跡群と時期的に重複するものと考えられる。特に、南支群の南1号窯跡については調査が行われ、詳細が明らかとなっている。⁽¹²⁾

さらに、岩戸支群の西側で天神窯跡が調査で明



第11図 三ツ塚廃寺跡

らかとなっている。⁽¹³⁾ 三ツ塚廃寺（第11図）の南東側に近接し、7世紀末以降の、三ツ塚廃寺所用窯であることが明らかとなっている。当窯跡では4基の窯跡が明らかとなり、瓦と須恵器が焼かれていたことが明らかとなっている。

〔参考文献〕

- (1) 楠野浩三「稻塚大塚古墳出土の須恵器について」「水上郡埋蔵文化財分布調査報告書(2)－兵庫県水上郡春日町－」兵庫県水上郡教育委員会 1995
- (2) 兵庫県水上郡教育委員会「水上郡埋蔵文化財分布調査報告書(2)－兵庫県水上郡春日町－」1995
- (3) 西口圭介・鐵英紀「山田大山古墳群－〈砂〉大山谷川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」兵庫県教育委員会 2017
- (4) 中川涉「火山古墳群 火山城跡 火山遺跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道(春日和田山道路Ⅰ)建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－」兵庫県教育委員会 2005
- (5) 村山美生・徳原多喜雄「平松片山古墳」水上郡教育委員会・水上古代史研究会 1995
- (6) 井守徳男「七日市遺跡(1)－第3分冊－(飛鳥・奈良・平安時代遺跡の調査)－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XII-3)－」兵庫県教育委員会 1991
- (7) 長濱誠司「七日市遺跡(3)弥生～平安時代の調査 近畿自動車道敦賀線(吉川～福知山)建設事業(春日JCT)に伴う発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 2003
- (8) 加古千恵子・平田博幸「山垣遺跡－「里長」関連遺構の調査－発掘調査報告書 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XIII)」兵庫県教育委員会 1990
- (9) 第10図は、東昭吾氏の踏査成果(東昭吾「付録 稲塚窯跡群」「兵庫県丹波市所在 鴨庄古窯跡群詳細調査報告書(1)－鴨庄古窯跡群詳細分布調査報告－」東昭吾編集・発行2016)に依拠している、このため、兵庫県遺跡地図に掲載されていない窯跡についても、マーキングしている。
- (10) 兵庫県水上郡教育委員会「水上郡埋蔵文化財分布調査報告書(2)－兵庫県水上郡春日町－」1995
- (11) 東昭吾「付録 稲塚窯跡群」「兵庫県丹波市所在 鴨庄古窯跡群詳細調査報告書(1)－鴨庄古窯跡群詳細分布調査報告－」東昭吾編集・発行 2016
- (12) 吉田昇「近畿自動車道舞鶴線建設に伴う 鴨庄古窯跡群(1)－南1号窯跡－」兵庫県教育委員会 1988
- (13) 五十川伸矢「丹波三ツ塚遺跡Ⅳ 三ツ塚廃寺跡発掘調査報告 天神窯跡発掘調査報告」兵庫県水上郡市島町・丹波三ツ塚遺跡発掘調査団 2000

第3節 稲塚窯跡群

1. はじめに

稲塚窯跡群については、遺跡地図に掲載されていたのは、「稲塚1号窯跡」と「稲塚2号窯跡」の2基であった。⁽¹⁾両窯跡については、『丹波水上郡志』第二編第八章に

「(略)大歳神社の北東隅、安穏寺の麓に當り、古代の竈跡と見るべきものニケ所あり、延長約一間半の間、地上五六尺の所に灰及び土器の破片の層あり、其の他附近の地中より硬質土器の大なる破片を多く發見せらる、野上野の竈跡と共に古代の祝部土器を製作せし跡なるべし。」

との記載がある。当地に2基の窯跡が知られていたことは明らかである。この上記2基のうち、1基については「稲塚1号窯跡」が該当するものと考えられる。しかし、もう1基については、「兵庫県遺跡地図」の備考では「稲塚2号窯跡」をあてている。しかし、上記記述の内容から判断すると、後述する「稲塚4号窯跡」である可能性も考えられる。

一方、同じ『丹波水上郡志』第一編第六章に

「黒井町稲塚小字西谷の古代窯跡より會て山キズある壺形土器一個を採取したり、蓋し郡内唯一の窯跡立証證の好資料とす。」

とある。稲塚小字西谷については、旧稲塚村の字限図（第13図）をみると、「千丈寺山の南西」、「西山」の東側「西谷」の字名が認められる。この「西谷」はその描かれ方から、「稲塚3号窯」の所在する谷に対して西側にある谷に該当する可能性が極めて高い。また、「西山」が西側で「古河」と境をなしている。そしてこの「西山」の示す範囲と「西谷」との位置関係から、「西谷」が谷奥側に位置することが理解できる（第14図）。この字限図を現地に直接当てはめることは困難であるが、これらの字名の位置関係等から、現在の安穏寺付近に比定できるのではないかと考えられる。したがって、上記窯跡については「稲塚4号窯跡」を示すものと考えられる。

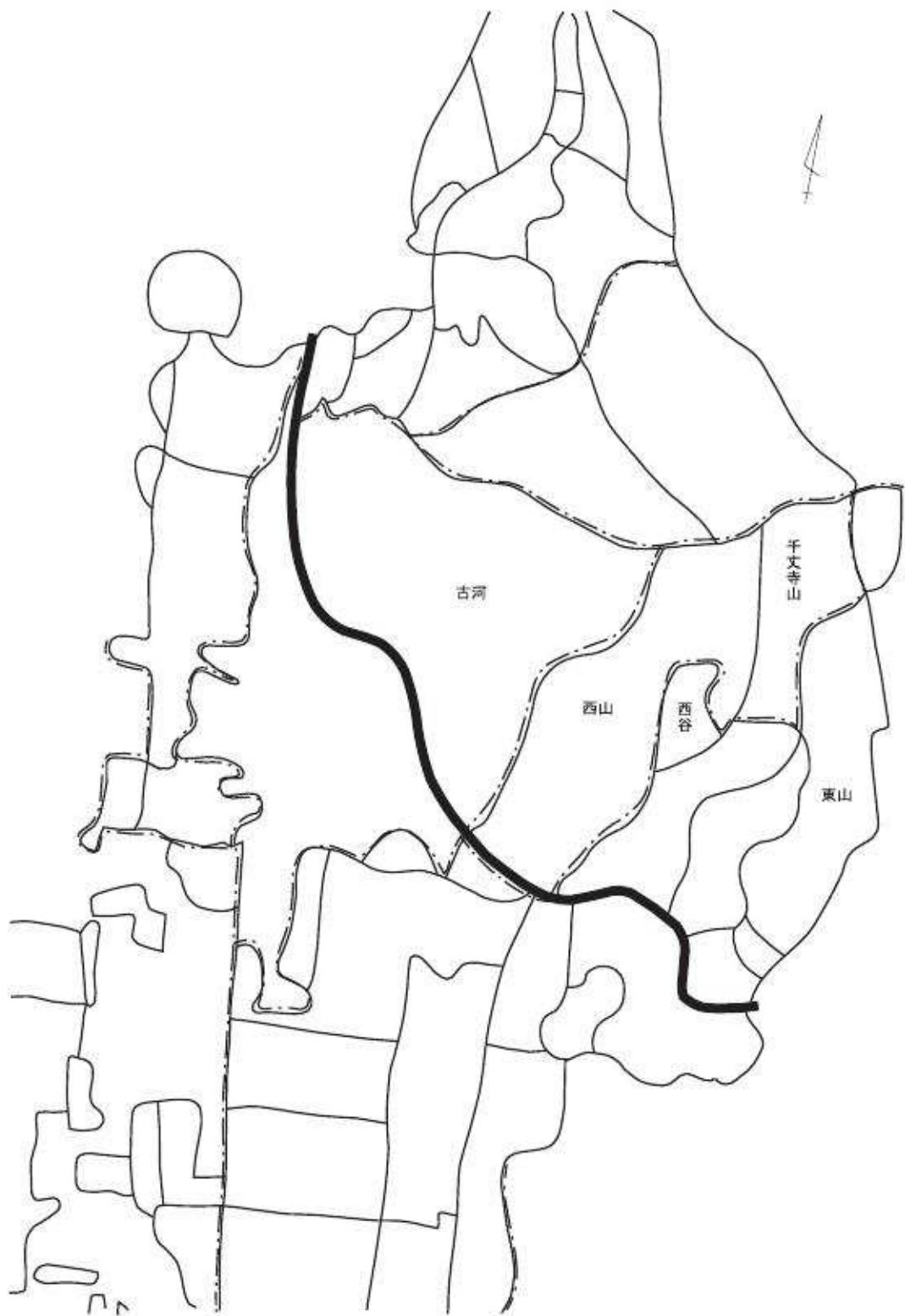
本報告の窯跡（稲塚3号窯跡）については、未周知の窯であった。さらに、稲塚3号窯を調査中、丹波市市島町出身の東 昭吾氏が、稲塚の地をこまめに踏査され、別に3基の窯跡を発見されていることが明らかとなった。そしてこの3基の窯跡については、東 昭吾氏に直に現地を案内していただいている。さらに東 昭吾氏は、その踏査成果の詳細について、表採土器の実測図も含め、一冊の報告書にまとめられている。⁽²⁾

その後、稲塚3号窯の調査終了後、改めて当該地の踏査を行った。その結果、東 昭吾氏から御教示いただいた窯跡で、新たに土器を採集することができた。さらに、新たに別の2地点で土器を採集し、2基の窯跡が追加されることとなった。この結果、稲塚窯跡群は計9基からなる窯跡群であることが明らかとなった。

上記の経緯を踏まえ、本節では改めて各窯跡についてまとめることとした。この作業にあたり、新たに表採した遺物の実測を行い、東 昭吾氏により報告された実測図に追加している（第17・20・21図）。また、各窯跡の番号については、東



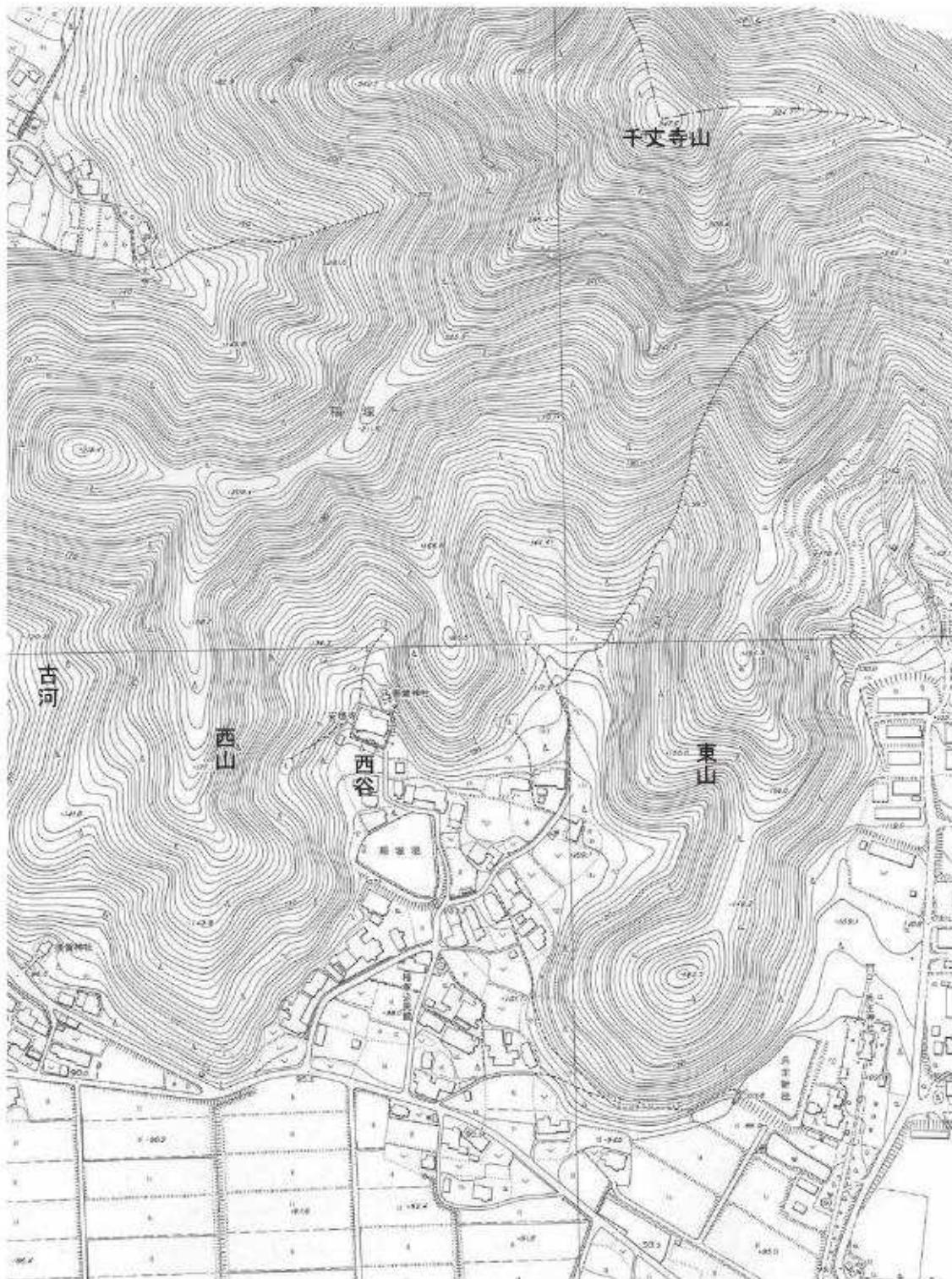
第12図 黒井城跡から見た稲塚窯跡群遠景



第13図 旧稻塚村字限図

昭吾氏が付けた番号に、新たに発見した番号については追加する形で付けていった。そして、この番号で丹波市教育委員会が遺跡地図への追加登録を行っている。

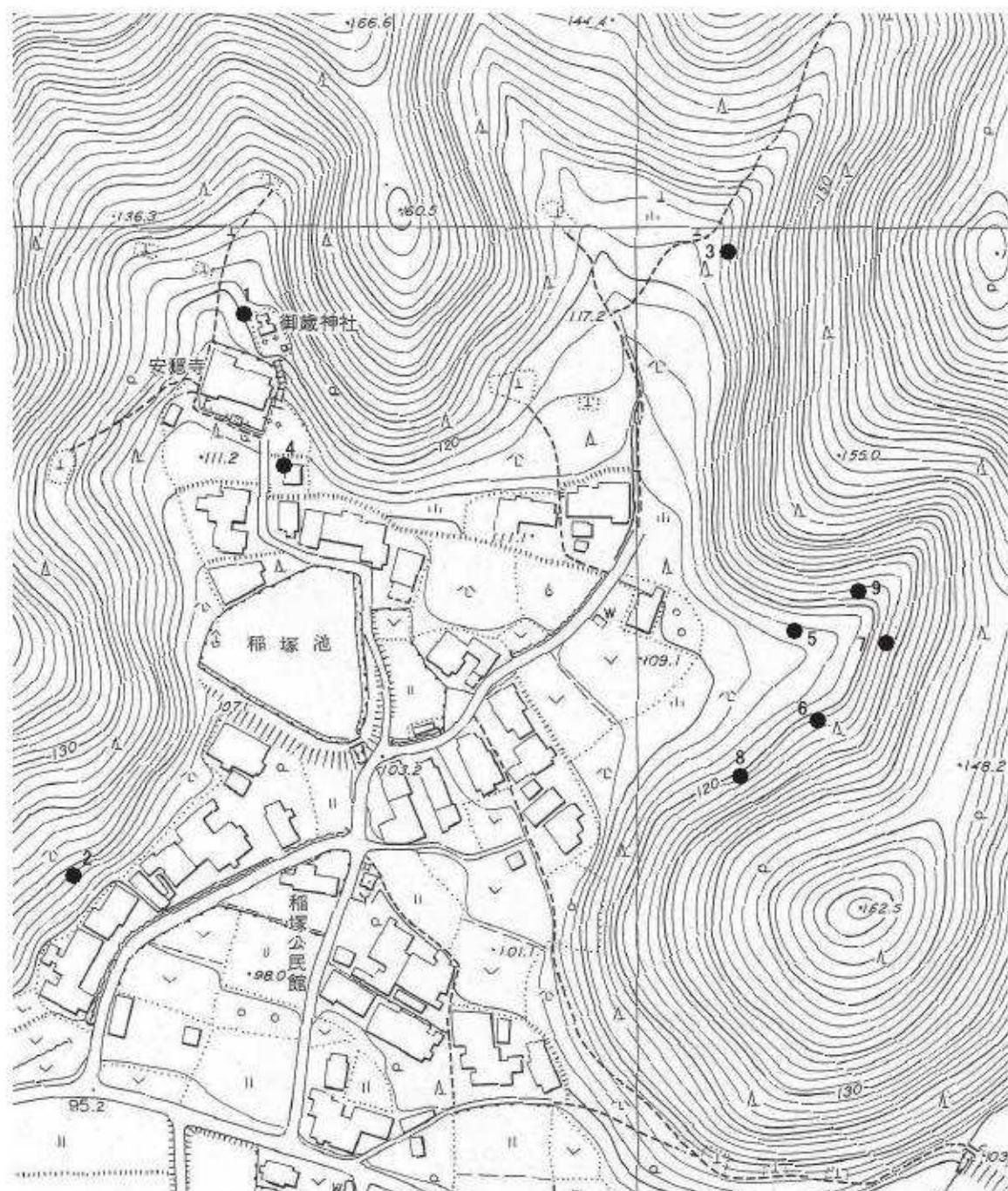
なお、本節をまとめるにあたり、東 昭吾氏の地道な踏査成果に多くを負っていることをあらためて明記しておきたい。



第14図 主要小字現地比定図

2. 稲塚窯跡群

稲塚窯跡群は、春日町稲塚に所在する古窯跡群である。稲塚は3方を山塊に囲まれた谷地形にあり、この谷を形成する山塊斜面に窯跡が染かれている。現在明らかとなっているのは、9基（1号窯～9号窯）である（第15図）。稲塚窯跡群が所在する稲塚の谷は、大きくは1つの谷からなる。その規模は、入口部の幅が約250m、入口部から最奥部までの距離が約400mである。そして、この谷をより細かく見ると、奥側（北側）で小さな3つの谷に分かれている。



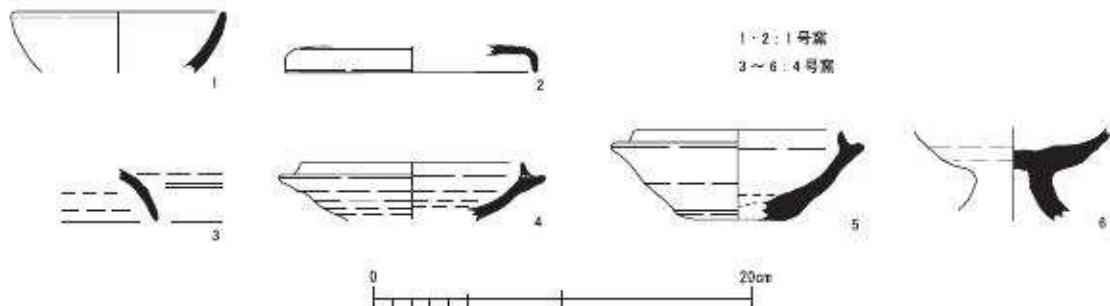
第15図 稲塚窯跡群

1号窯と4号窯が西側の谷に、3号窯が中央部の谷に、5号窯～9号窯が東側の谷に所在する。2号窯は、稲塚の谷の入口に近い西側斜面に位置する。

なお、以下に掲載する土器の実測図のなかで、6・7・9～13・16・17については、東昭吾が表採され、氏の報告書に掲載されているものである。東氏からその遺物お借りし、再実測もしくは再トレースさせて頂いたものである。



第16図 稲塚1号窯跡



第17図 稲塚1号窯・4号窯出土土器

(1) 1号窯跡

「兵庫県遺跡地図」に遺跡番号790043として報告されている。「丹波水上郡志」に記載が認められる窯跡である。稲塚池の北側の小谷に位置する安穏寺の裏側、東側斜面にあたる(第16図)。杯(1)と壺蓋(2)が表採されている(第17図)。

(2) 2号窯跡

「兵庫県遺跡地図」に遺跡番号790044として報告されている。先述したように、稲塚の谷の入口、東向き斜面にあたり、他の窯とは離れた位置にある。

(3) 3号窯跡

本書で報告する窯跡である。発見の経緯・調査成果の詳細については、第3章を参照されたい。なお、3号窯の周辺では、須恵器片・窯体片・炭片・灰層等を見つけることはできず、窯跡を確認することはできなかった。

(4) 4号窯跡

1号窯跡の南側約60mの地点で、安穏寺の南東側に隣接する敷地にある。杯H(4・5)・杯H蓋(3)・高杯(6)が表採されている(第17図)。なお、当該地点の北東側斜面を観察したが、窯跡・灰原の痕跡は認められなかった。「丹波水上郡志」の記載内容から、当窯が1号窯跡とともに記載されている窯の一つの可能性が考えられる。

(5) 5号窯跡

3号窯跡の南側約140mの地点にある。南向きの緩斜面に多くの須恵器・窯体片が散乱している。杯A(12・13)・杯B(11)・杯B蓋(7~10)・杯H(14)・高杯(17)・壺蓋(15)・壺(16)が採集されている(第20図)。

(6) 6号窯跡

5号窯跡の南約35mの地点にある。杯B・杯B蓋・杯G・高杯・壺・土師器が表採されている。

(7) 7号窯跡

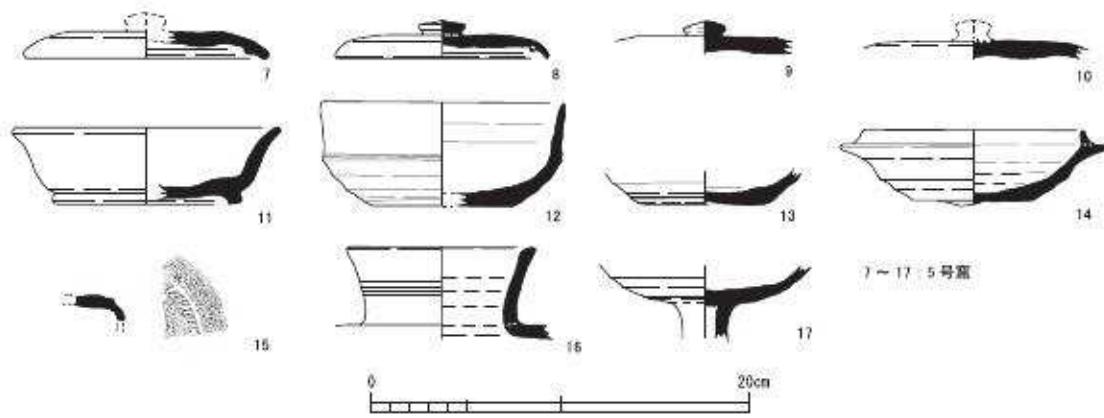
5号窯跡の東側約40mの地点である。杯蓋の口縁部片(18)が採集されている(第21図)。



第18図 4号窯跡 土器散布状況



第19図 5号窯跡 土器散布状況



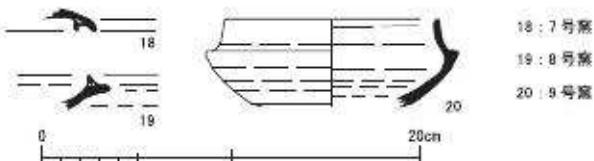
第20図 稲塚5号窯出土土器

(8) 8号窯跡

6号窯跡の南西側約40mの地点にあたる。杯Hの口縁部片(19)が採集されている(第21図)。

(9) 9号窯跡

5号窯跡の北東側約30m、7号窯跡の北西約20mの地点にあたる。杯身(20)が採集されている。当窯南東側の沢は、黒色をなし、灰原の存在を伺うことができる(第21図)。



第21図 稲塚7～9号窯出土土器

[参考文献]

- (1) 兵庫県教育委員会「兵庫県遺跡地図」2011
- (2) 丹波史談会『丹波水上郡志』1927
- (3) 東 昭吾「付録 稲塚窯跡群」「兵庫県丹波市所在 鶴庄古窯跡群詳細調査報告書(1) - 鶴庄古窯跡群詳細分布調査報告 -」東 昭吾編集・発行2016

第2章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

稻塚川を中心に形成された小谷の南側の扇状地には、稻塚の集落が形成されている。ところで、平成26年度に稻塚集落背後の谷部で稻塚川が氾濫したが、幸い稻塚集落に被害を及ぼすには至らなかった。そこで、丹波土木事務所は、(砂) 稲塚川 災害関連緊急砂防事業を計画した。この事業予定地内は、一部史跡黒井城跡の範囲内にかかることが明らかとなった。そこで、史跡内にかかる箇所について、史跡関連の遺構等の有無を確認すべく、確認調査を行うことになった。

第2節 調査の経緯

1. 確認調査

確認調査は、史跡黒井城跡内にあたることから行われたもので、前節で触れた事業に伴う分布調査は行われていない。調査内容・体制等は以下の通りである。

遺跡調査番号 2015120

調査期間 平成27年9月29日～30日

調査面積 24m²

調査担当 兵庫県立考古博物館総務部

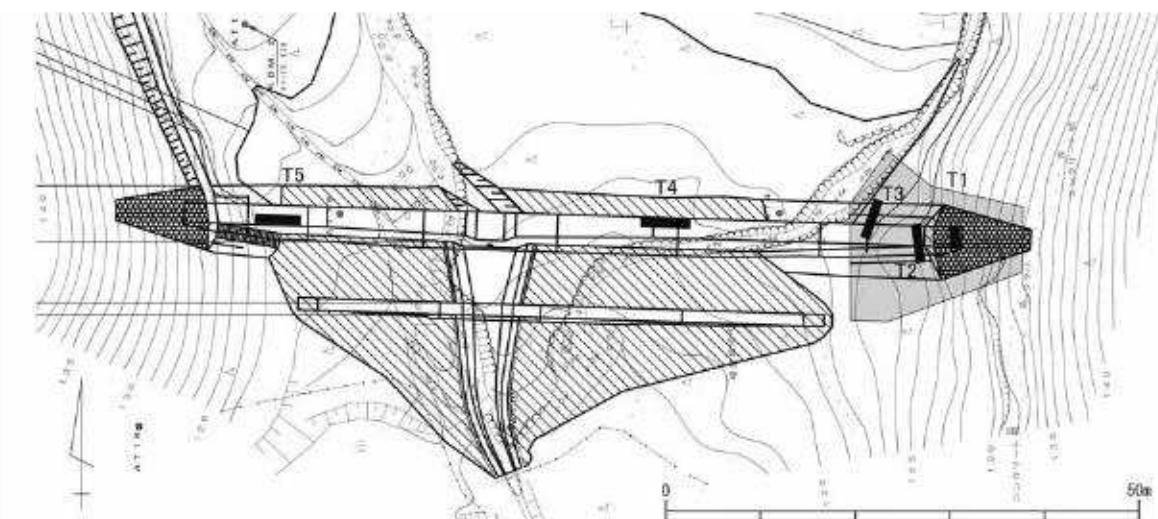
埋蔵文化財課

山本 誠・池田征弘・上田健太郎

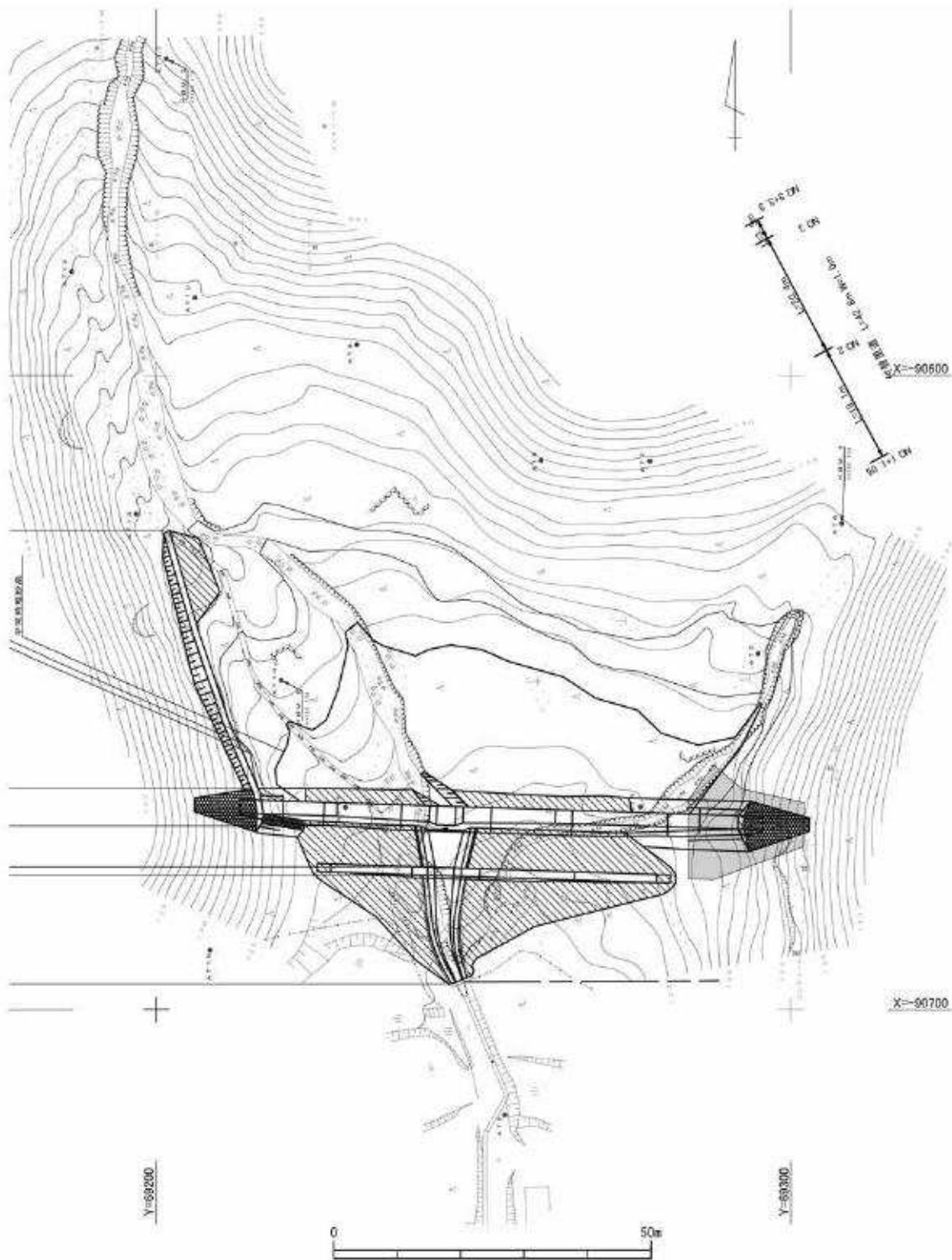
調査概要 幅1mのトレンチを5箇所に設定し(T1～T5: 第23図)、埋蔵文化財の有無を調べていった(第22図)。なお、トレンチの長さについては、3m～6mと、状況に応じて設定していく。この結果、T1において窓体の一部を確認す



第22図 確認調査風景



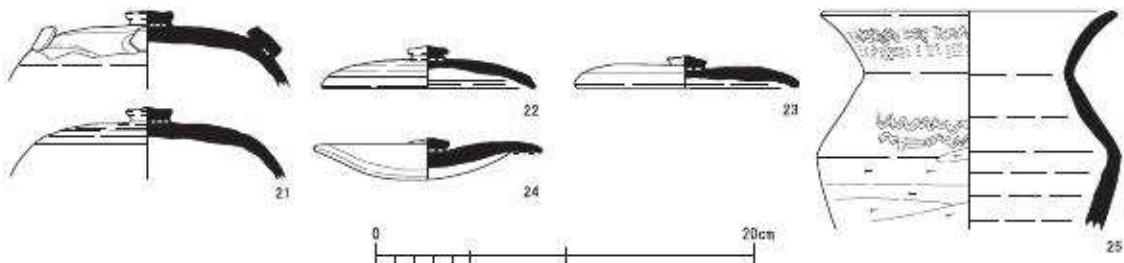
第23図 確認調査位置図



第24図 工事計画と調査位置

るとともに、T2において多くの須恵器と窯体片の出土が確認された（第25図）。

21は、杯B蓋であるが、重ね焼きの際の軸着が顯著な個体である。当該期の杯蓋としては天井部が高い傾向にあるが、焼け歪みによるものと考えられる。天井部は回転ヘラ削りにより、他は回転ナデにより仕上げられている。22~24は、杯Bの蓋である。この3個体のいずれにおいても、口縁部内面には断面蒲鉾状のかえりの痕跡がわずかに認められる。高さ約1mm~2mmほどである。いずれも、つまみは宝珠形をなしている。回転ナデ仕上げを基調とし、天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。25は壺で



第25図 確認調査出土土器

ある。体部は算盤玉形をなすものと考えられ、下半外面はヘラ削りにより仕上げられている。他は回転ナデにより仕上げられている。また、体部上半外面と口縁部外面には櫛描波状文が施文されている。前者は2条を1単位とした波状文が2帯、後者は4条を単位とした波状文が2帯である。いずれも、稚拙な施文である。

一方、T4については灰原の、T5については別の窯跡の、それぞれ有無を確認すべくトレンチを設定し調査をおこなったが、遺構・遺物は全く確認されなかった。なお、この調査では、史跡黒井城跡に関する遺構・遺物は全く認められなかった。

以上から、調査対象地の東側斜面に、須恵器を焼成した窯跡の存在が明らかとなり、本発掘調査を行うこととなった。

2. 本発掘調査

調査内容・体制等は以下の通りである。

遺跡調査番号 2016002

調査期間 平成28年5月27日

～平成28年7月11日

調査面積 223m²

調査担当 (公財)兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部調査課
山田清朝・大本朋弥

調査概要 調査地は、えん堤工事予定地の東端部にあたる(第24図)。えん堤は、南北にのびる小規模な二つの谷が合流する箇所に設置されるもので、調査地は東側の小谷東側斜面にあたる。調査地は、杉が植林された急斜面で、その現地盤の傾斜角は約37°である。

調査は、この杉林を伐採後に開始した。調査はすべて人力により進めていった。調査成果については、無人航空機(ラジコンヘリ)により撮影し、これをもとに図化を行った。また、窯体の検出が一段落した7月3日には、一般県民を対象とした現地説明会を行った(第27図)。58名の参加があった。



第26図 えん堤竣工状況と稲塚3号窯跡(右端)南から



第27図 現地説明会

第3節 整理作業

1. はじめに

整理作業は、平成29年度と平成30年度の2箇年にわたり行われている。各年度の調査内容・体制等は以下の通りである。

2. 整理作業の経過

各年度の整理作業の概要・体制等は以下の通りである。

(1) 平成29年度

整理概要 出土遺物の接合・補強、実測、写真撮影をおこなった。また、遺構図のレイアウト・トレースを行った。

整理体制 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 菊田淳子・深江英憲・大本朋弥

調査課 山田清朝

嘱託員 萩野麻衣・今村直子・門田諭佳・普生真理子・沼田眞奈美・小野潤子

中井翠・小林礼子・長井香苗・柏原美音・佐伯純子・前田陽子

古谷章子・尾鷲都美子・寺西梨紗・平宮可奈子

(2) 平成30年度

整理概要 遺物・遺構図のレイアウト・トレースを行った後、原稿執筆・編集作業をおこなった。

整理体制 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 菊田淳子・深江英憲・大本朋弥

調査課 山田清朝

嘱託員 柏原美音・古谷章子・宮田麻子・尾鷲都美子・寺西梨紗

第3章 調査の成果

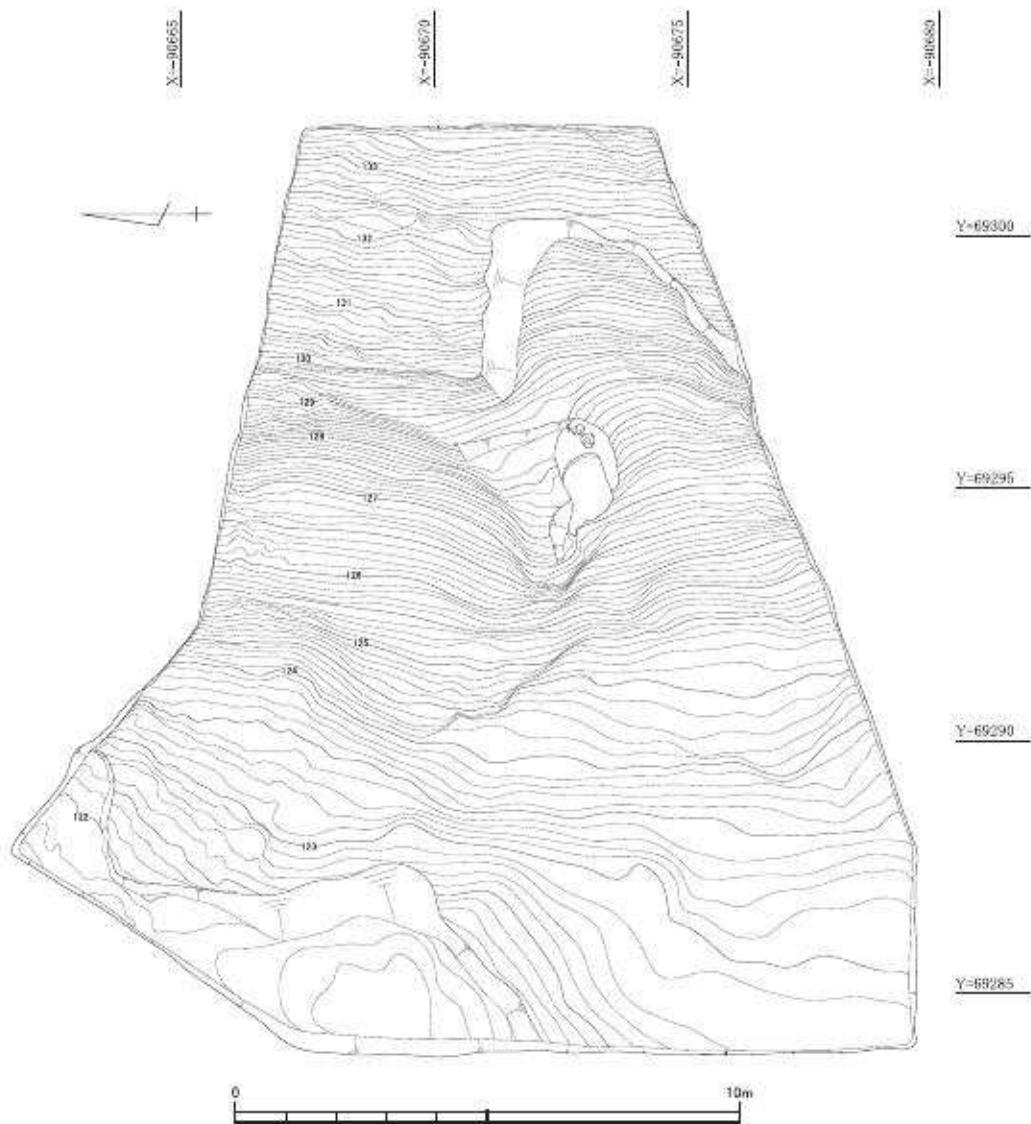
第1節 概要

千丈寺山南麓にはいくつかの谷があり、その中の一つに稲塚集落がある。この集落の所在する谷の奥で3つの枝谷に分かれており、中央に位置する谷はさらに2つに分岐している。稲塚3号窯はこの分岐点の東斜面に築かれており、集落より北に200mほど離れた地点に位置する。

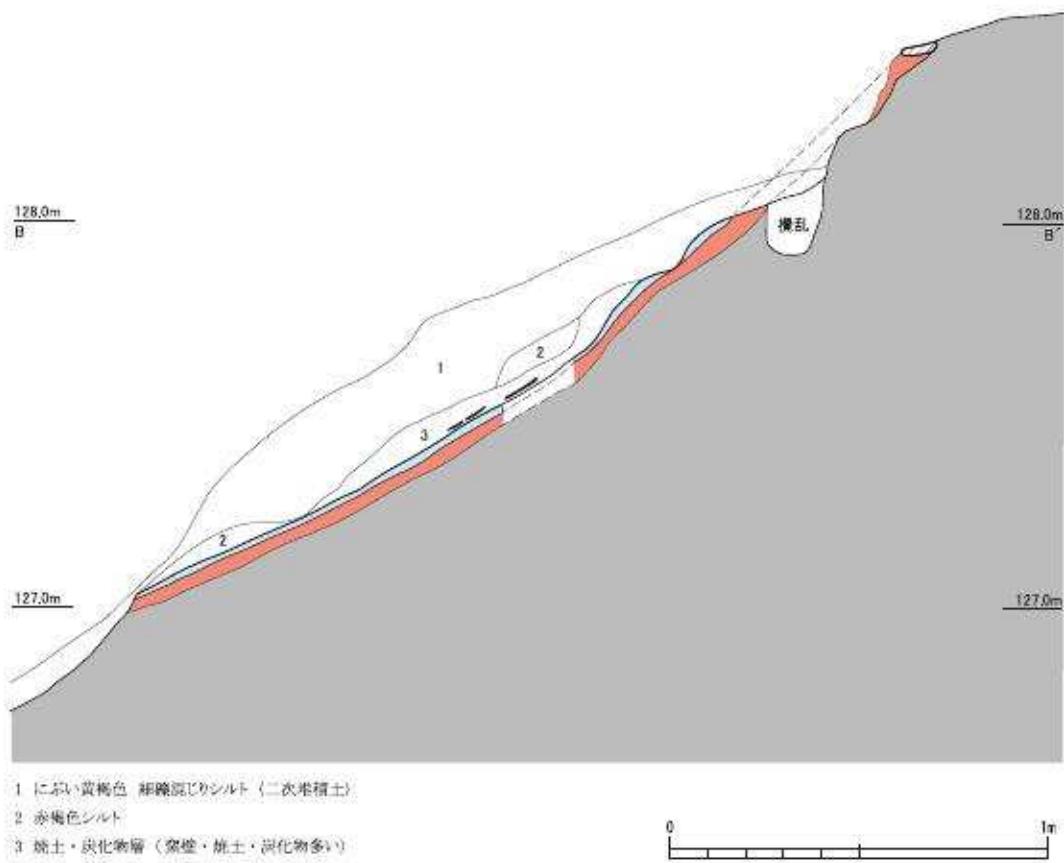
調査区は標高122m～134mの斜面に設定した（第24図）。調査区西半は傾斜が緩やかなテラス状の地形になっており、調査区に沿って小沢が流れ



第28図 調査風景



第29図 平面図



第30図 窯体内土層断面

ている。東半は傾斜約30°の急な斜面地となっており、斜面南側では調査区外まで15m以上の範囲で地滑り痕が見られた。

窯体はこの地滑りからわずかに下がった地点の現地表下約20cmで検出している。焼成部の東西2.3m、南北1.1mの範囲を検出したが、焚口・前庭部及び灰原は遺存していなかった(第33図)。地滑り等により流失したものと考えられる。

調査区西半の2段の平坦面は、表土除去後の精査で旧表土が平坦面を形成する黄褐色土層の下にもぐっていくことから、地滑りによって形成されたものと判明した。したがって、前庭部及び灰原については地滑り及び谷の開析作用によって失われたものと考える。

また、下の平坦面については谷全体を埋積する土石流の東端であることが明らかになった。この礫層については砂防堰堤の工事断面で谷中央部において5m以上堆積していた。近現代の墓石が埋没していることから、比較的最近まで断続的に供給されていたものと思われる。



第31図 窯跡の検出作業

第2節 遺構と遺物

1. 3号窯

形態と規模 半地下式の窯で、窯体の半分程度を地上に構築している。窯体残存長は実長で3.0m、水平長で2.6mを測る(第33図)。床幅は最大で1.1mを測り、上方で先端がわずかにすぼまり、裾に向かって外に広がる平面プランを持つ。ただし、裾部の広がりについては地滑りによって窯体下半が北西方向にずれ動いたことによる可能性が高い。

焼成部床面 斜面とほぼ同じ30°の角度で直線的に立ち上がるが、中ほどで約40°に傾斜を転じる(第30図)。上端付近には樹根による攪乱坑が2基あり、この付近でさらに角度を変えて直上方向に立ち上がる。したがって、この付近に煙道部が取りつくと考えられ、今回検出した範囲は窯体上半に相当する。

窯体内部の状況 天井部は崩落しており、側壁の



第32図 窯体内遺物検出作業

残存高は最も高いところで30cmである。床面は1面のみで、補修痕跡等は認められなかった。側壁・床面ともに青灰色を呈するが、焼結の程度は極めて弱い。

床面上には主軸線南側を中心に須恵器の破損品が残されており、この出土状況から主軸線北側を窯出しの通路部にしていたことが想定される。床面は径1.0cm程度の窯壁片・焼土・炭化物を多量に含むしまりの悪い粒状の焼土・炭化物層(第3層)により覆われている(第30図)。焼土より上層は径5.0cmまでの窯壁片をわずかに含むシルトベースの表土二次堆積層(第1層)だが、一部焼土の影響で赤褐色を呈している(第2層)。

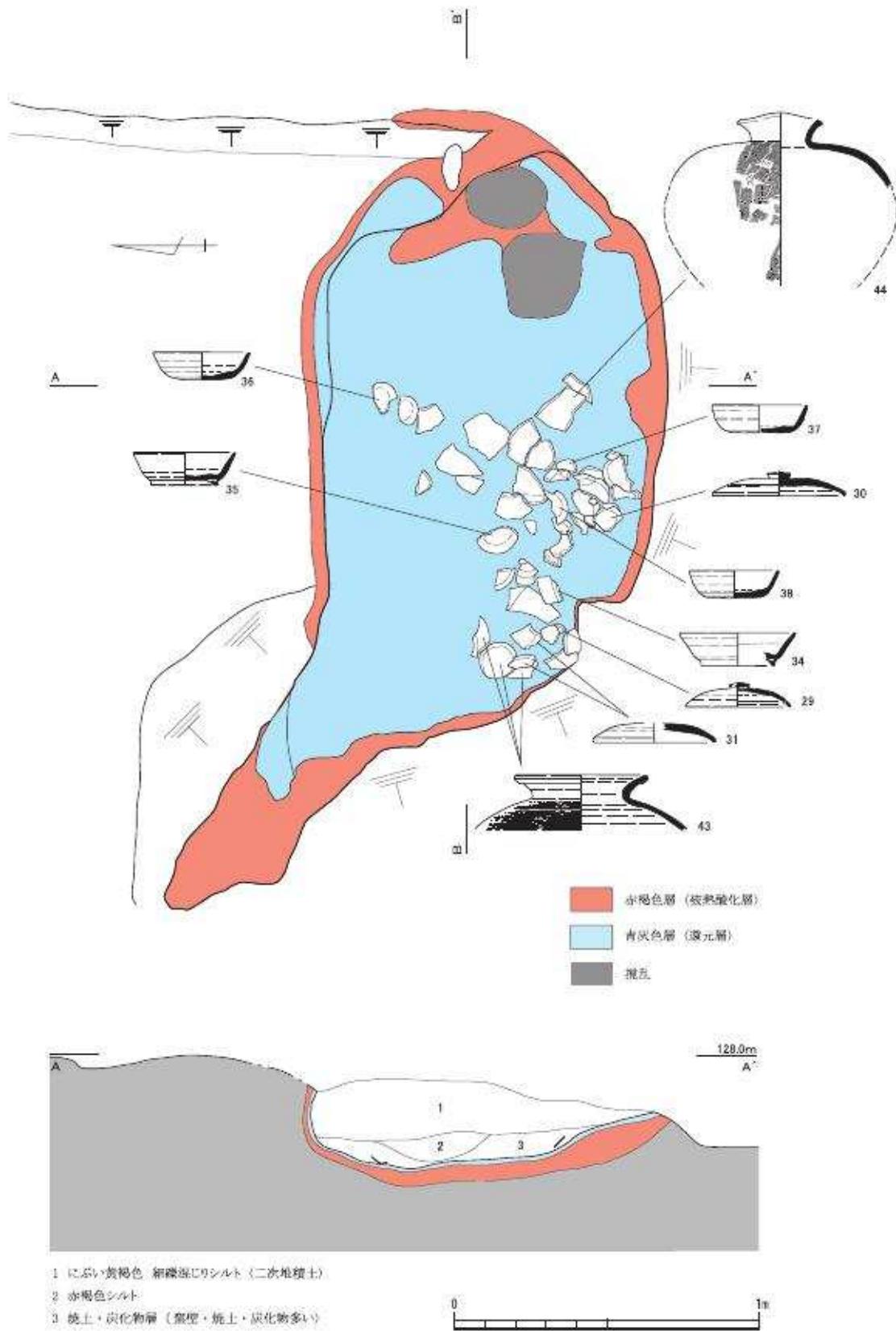
2. 出土遺物

本調査ではコンテナ14箱分の須恵器が出土している。器種は杯A、杯B・杯B蓋が中心でその他に壺・甕・高杯がわずかに出土している。その多くは焼け歪み、釉着、火ぶくれ、焼成不良などが見られる焼成失敗品である。

(1) 窯体床面及び焼土層

窯体床面上およびこれらを覆う焼土・炭化物層からは杯B蓋・杯B、杯A、甕が出土している(第34図)。杯B蓋 6点を図化している(26~31)。いずれも笠状の断面形を呈するが、全体に焼け歪みがある。26~29は口縁部内面に身受けのかえりを有しており、30・31はかえりが無い。26のかえりは断面蒲鉾状の痕跡となっているのに対し、27~29は断面三角形で稜をなしている。口径17.1cm~18.35cmの大型のもの(26~28)と口径13.5cmのやや小型のもの(29)がある。両者とも回転ナデ仕上げを基調とし、天井部は回転ヘラ削りで仕上げられている。28は扁平な宝珠形のつまみが付く。やや焼成不良で、わずかに器形が歪んでいる。29は口径が小さい分全体に丸みを帯びるが、全体に歪みが見られる。焼成はやや不良である。

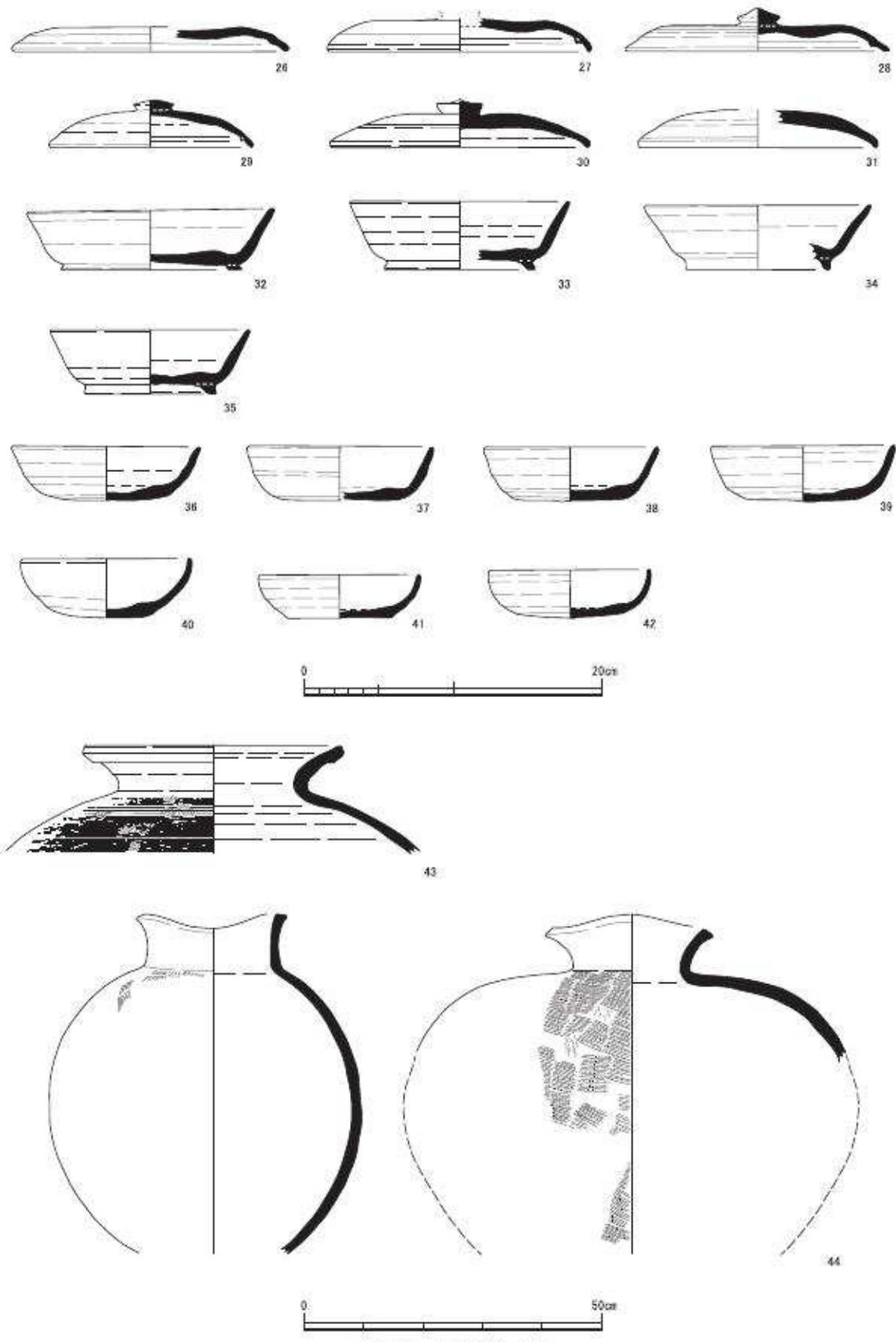
30・31は身受けのかえりがないもので、回転ナデ仕上げを基調とし、天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。30は扁平宝珠形つまみが付き、口縁端部を丸く取めるのに対し、31は面取りして稜をなしている。両者とも焼成は良好だが、歪みが大きい。



第33図 窑体内遺物出土位置図・横断図

杯B 4点を國化している(32~35)。いずれも底部内面~口縁部にかけてナデ調整を基調として、底部外面はヘラ切り後ヘラ削りにより仕上げられている。

33・35はヘラケズリ後さらにナデ調整で比較的丁寧に仕上げられている。口縁部は外に開いて直線的



第34図 出土遺物(1)

に立ち上がり、4～7mmの低い高台が外方に踏ん張る形で貼り付けられている。32・35はやや焼成不良で、32は焼け歪みにより口縁部がやや外側に開いている。

杯A 7点を図化している(36~42)。口縁部が底部から外方に直線的に立ち上がるもの(36~39)と、内湾しつつ立ち上がるもの(40~42)、の2種類がある。いずれも底部はヘラ切り後ナデ調整により仕上げられているが、体部～口縁部内外面はナデ調整により仕上げられている。

39は底部をヘラ削り後、さらに体部と底部の境界付近を格子状に削り調整している。焼成については、41を除きいずれもやや不良であり、口縁部付近を中心に焼け歪みがあるものが多い。40は口縁部付近が黒色を呈しており、重ね焼きの痕跡と考えられる。

甕 窯体内での出土は2点のみである(43・44)。43は口縁部～肩部が残存しており、肩部は一部焼け歪みがある。口縁部が肥厚しており、内外面とも丁寧なナデ調整により仕上げられている。肩部はタタキのちカキメにより仕上げられている。焼成はやや良好である。

44は口縁部がほぼ完存するが、体部は6分の1程度しか残存していない。一見、横瓶状に見えるが、口縁部が波状になっていることから全体に扁平に焼け歪んでいるものと考えられる。口縁端部は面取りしており、口縁部は回転ナデ、体部内面は縦方向のナデ調整により仕上げられている。肩部～体部外面は格子タタキで仕上げられており、焼成は良好である。

(2) 窯体埋土(第35図)

窯体の上層埋土からは床面より遊離した状態で杯B蓋(45・46)・杯B(47~50)・杯A(51~54)・壺(55)が出土している。

杯B蓋 45は、口縁部内面に断面三角形のかえりが認められる。かえりの高さは3mm程度である。天井部には扁平な宝珠形つまみを貼り付け、天井部から口縁部にかけて緩やかに湾曲し断面笠型を呈し、端部は丸く收められている。口縁部および天井部内面はナデ調整を基調として仕上げられており、天井部外面はヘラ削りにより仕上げられている。

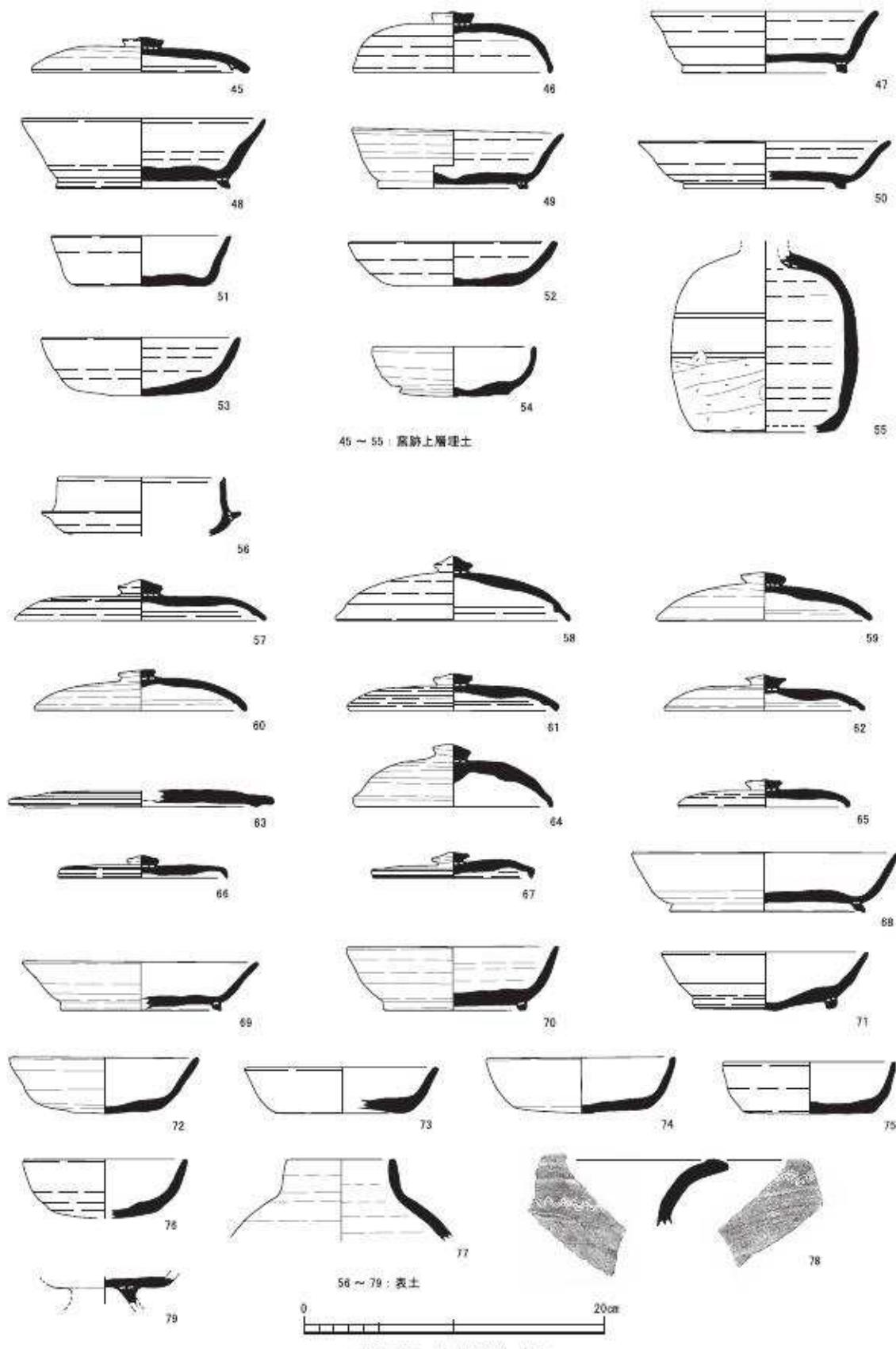
46は身受けのかえりが無く、扁平な宝珠形つまみが付く。器高が4.6cmと当該期の杯蓋に比べ高い傾向にあるが、焼け歪みによるものと考えられる。焼成は良好である。

杯B 4点を図化している。窯体床面出土のものと同様、底部内面～口縁部にかけてナデ調整を基調として、底部外面はヘラ切り後ヘラ削り調整により仕上げられている。

68・71はさらに底部外面をナデ調整で仕上げられている。高台についても4~7mmの低い高台が外方に踏ん張る形で貼り付けられている。47~49は口径14.1~16.9cm、器高9.9~10.7cm、径高指数27~28まとまるが、50は焼け歪みによって口縁部が外側に大きく開いた結果、口径16.6cm、器高3.2cm、径高指数19と小さくなっている。焼成については、48はやや不良であるが、他の3点は比較的良好である。

杯A 口縁部が直線的に立ち上がるもの(51)と、内湾して立ち上がるもの(52~54)がある。いずれも底部の切り離しはヘラ切りによるもので、54はヘラ痕が底部と体部の境界に沈線状に残っている。51と52は底部をさらにナデ調整で仕上げ、底部に格子状の削り痕跡が残る。焼成はいずれもやや不良である。

壺 55は長頸壺の肩部～底部で、体部上半には2本の沈線文が施されている。内面はナデ調整、外面は沈線より上方を回転ナデ、下方を上から斜め下方向の静止ヘラ削り調整で仕上げられている。焼成は良好だが、底部・体部ともに焼け歪みにより広がっている。また、肩部外面の一部と肩部及び底部内面に自然釉が付着していることから、焼成段階で破損したものと考えられる。



第35図 出土遺物 (2)

(3) 表土(第35図)

杯身 1点出土している(56)。口径11.1cm、器高3.9cmの蓋受けがある杯身で、口縁部は上方に立ち上がり、口縁端部は段状になる。回転ナデを基調とし、底部外面を回転ヘラ削り調整によって仕上げられている。6世紀前葉に位置付けられるが、この他の出土遺物とは大きく時期が異なる。本窯の尾根上は古墳状の高まりがあることから、これに伴う可能性がある。

杯B蓋 11点を図化している(57~67)。口縁部内面に身受けのかえりを有するもの(57~63)と、かえりのないもの(64~67)がある。かえりは断面蒲鉾状で、高さ1~2mmの低平なものとなっている。60を除き、扁平な宝珠形つまみが付いている。いずれも天井部外面をヘラ削り、口縁部外面及び内面をナデ調整で仕上げられている。

57は天井部を平坦にヘラ削りし、肩部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、断面笠形となる器形である。口縁部の一部が歪んでいる他、焼成はやや不良で、表面は磨滅している。58は器高が4.4cmと高く、器高が当該期の蓋に比べ高い傾向にあるが、焼成時の変形によるものと考えられる。全体的にやや歪みが見られるものの、焼成は良好である。59~62は天井部~口縁部まで一連に内湾する断面形になっている。59・60は焼成不良で内外面とも磨滅している。61は焼成良好だが、天井部には割れによる段差ができている。これについては焼成時のものと考えられる。62も焼成は比較的良好だが、天井部外面に焼成時の亀裂がみられる。この他に口縁部外面には重ね焼きの痕跡が残っている。63は天井部~口縁部までほぼ平坦かつ直線的な円盤状を呈する。焼成は良好であるが、全体に歪みが見られ、口縁部内面には整形時の粘土塊が付着している。

64は器高が4.2cmと高く、天井部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁端部がわずかに屈曲する器形を呈する。内外面に重ね焼きの痕跡が見られ、内面の一部には別個体が釉着している。焼成はやや不良で、所々に火ぶくれが見られ、全体的に歪みが著しい。65は天井部~口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁端部付近で弱く屈曲する器形である。焼成は良好だが、全体に歪んでいる。66と67は天井部から口縁部まで平坦にヘラ削り調整により仕上げられ、口縁端部が強く屈曲して身受けになっている。口縁部

第2表 出土遺物観察表(1)

No.	器種	場所	遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	径高指数
1	杯	1号窯		表採	(11.0)	(3.2)		
2	壺蓋	1号窯		表採	(13.1)	(1.4)		
3	杯蓋	4号窯		表採				
4	杯H	4号窯		表採	(11.7)	(3.1)		
5	杯H	4号窯		表採(東氏所有)	(13.4)	(4.3)		
6	高杯	4号窯		表採(東氏所有)		(4.0)		
7	杯蓋	5号窯		表採(東氏所有)	(13.4)	(1.4)		
8	杯蓋	5号窯		表採	(11.1)	(2.0)		
9	杯蓋	5号窯		表採(東氏所有)				
10	杯蓋	5号窯		表採(東氏所有)				
11	杯B	5号窯		表採(東氏所有)	(14.3)	(4.0)		28.0
12	杯A	5号窯		表採(東氏所有)	(12.8)	(5.4)		42.2
13	杯A	5号窯		表採(東氏所有)				
14	杯H	5号窯		表採	(11.7)	4.0		
15	壺蓋	5号窯		表採				
16	壺	5号窯		表採(東氏所有)	(9.8)	(4.9)		
17	高杯	5号窯		表採(東氏所有)		(4.0)		
18	杯G	7号窯		表採				
19	杯H	8号窯		表採				
20	杯身	9号窯		表採	(11.1)	(4.6)		

端部及び内面は回転ナデ調整により仕上げられている。

杯B 4点を図化している(68~71)。底部内面~口縁部にかけてナデ調整を基調として、底部外面はヘラ切り後ヘラ削り調整により仕上げられている。また、36を除いて底部外面はナデ調整で仕上げられている。69は全体に焼け歪みが著しく、口径に対して器高が低くなっている。70は歪みが少ないが、高台が一部剥離している。この剥離箇所では高台貼付けの際に接着力向上を目的とした沈線が1~2条刻まれている。焼成は不良である。71は高台が接地しないほど底部の歪みが大きく歪んでいる。

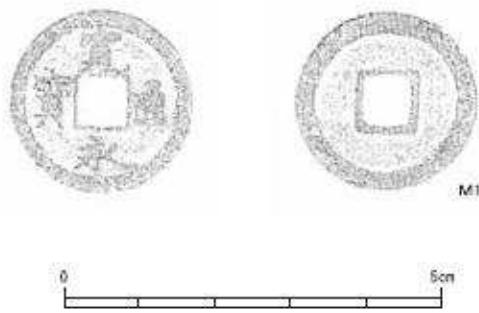
杯A 5点を図化している。口縁部が直線的に立ち上がるもの(72~75)と、内湾して立ち上がるもの(76)がある。いずれも底部の切り離しはヘラ切りによっている。底部外面は板ナデで仕上げられているが、72のみ未調整である。73~76は比較的焼成が良好であるが、一部焼け歪みが見られる。口径は10.8~12.7cm、器高は3.1~3.9cmである。

壺 1点を図化している(77)。短頸壺の口縁部~肩部である。全体に歪んでおり、頸部の屈曲が緩やかになっている。口径6.8cm、内外面ともに回転ナデ調整により仕上げられている。また、口縁部外面に整形時の粘土片(5mm×2mm)が付着している。焼成は良好である。

甕 1点を図化している(78)。口縁端部内面を段状に肥厚させる甕の口縁部片である。口縁内外面に柳描波状文(2本1対)が描かれるが、稚拙な施文である。内外面ともナデ調整により仕上げられており、焼成は良好である。

高杯 1点を図化している(79)。杯部底部と脚部の一部が残存している。焼成不良で磨滅が著しい。

銭 寛永通寶(M1)が1点出土している(第36図)。書体と銭容から1697年以降に鋳造された新寛永と考えられる。調査区より50m北側には享保年間の近世墓が所在しており、これらに伴うものと考えられる。



第36図 出土銭

残存率	調 整		ロクロ方向	焼成	東(2016) 報告番号	挿図	図版
	調整外面	調整内面					
1/8	回転ナデ	回転ナデ		良好		17	—
1/8	回転削り、ナデ	回転ナデ		良好		17	—
小破片	回転ナデ	回転ナデ		良好		17	7
1/3	回転ナデ	回転ナデ		やや良好		17	7
1/2	回転削り→ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや良好	図版135-1	17	—
小破片	回転削り→ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	図版135-2	17	—
小破片	回転削り→ナデ	回転ナデ	時計回り	やや良好	図版135-3	20	—
1/4	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	良好		20	7
小破片	回転削り→ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや良好	図版135-5	20	—
	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	やや良好	図版135-4	20	—
1/6	回転削り→ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや良好	図版135-6	20	—
1/4	回転削り、ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや不良	図版135-8	20	—
	回転削り、ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや不良	図版135-7	20	—
1/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	良好		20	7
小破片	回転ナデ	回転ナデ		良好		20	7
1/4	回転ナデ	回転ナデ		やや良好		20	7
	回転ナデ	回転ナデ	反時計回り	良好	図版135-9	20	—
小破片	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	良好		21	7
小破片	回転ナデ	回転ナデ		良好		21	7
1/5	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	良好		21	—

第3章 調査の成果

第3表 出土遺物観察表(2)

No.	器種	場所	遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	径高指数
21	杯B蓋	確認調査				(3.8)		
22	杯B蓋	確認調査			11.1	2.3		
23	杯B蓋	確認調査			11.5	1.7		
24	杯B蓋	確認調査			11.9	2.3		
25	壺	確認調査			(15.7)	(11.6)		
26	杯B蓋	3号窯	窯体	床面	18.35	2	12.2	
27	杯B蓋	3号窯	窯体	第3層	17.6	2.3	11.5	
28	杯B蓋	3号窯	窯体	第3層	17.45	2.98	17.6	
29	杯B蓋	3号窯	窯体	床面	13.5	3.2	10.4	
30	杯B蓋	3号窯	窯体	床面	17.1	3.15	12.75	
31	杯B蓋	3号窯	窯体	床面	15.8	2.5	10.2	
32	杯B	3号窯	窯体	第2層	16.5	4.15	12.1	25.2
33	杯B	3号窯	窯体	床面	14.7	4.6	10.15	31.3
34	杯B	3号窯	窯体	床面	15.15	4.35	9.7	28.7
35	杯B	3号窯	窯体	床面	13.3	4.35	8.3	32.7
36	杯A	3号窯	窯体	第2層	12.6	3.5	7.1	27.8
37	杯A	3号窯			12.3	3.6	7.8	29.3
38	杯A	3号窯	窯体	第3層	11.6	3.7	7.9	31.9
39	杯A	3号窯	窯体	第2層	12.2	3.8	7.7	31.1
40	杯A	3号窯	窯体	床面	11.3	4		35.4
41	杯A	3号窯			10.65	2.95	7	27.7
42	杯A	3号窯	窯体	第3層	10.7	3.3	7.4	30.8
43	甕	3号窯	窯体	床面	(21.3)	(9.1)		
44	甕	3号窯	窯体	床面	(12.6) (11.1)	28.4		
45	杯B蓋	3号窯	窯体	第1層	14.2	2.35	7.8	
46	杯B蓋	3号窯	窯体		12.9	4.05	10.7	
47	杯B	3号窯	窯体	第1層	14.9	4.1	10.8	27.5
48	杯B	3号窯	窯体	第1層	16.2	4.65	11.65	28.7
49	杯B	3号窯	窯体	第1層	14.05	4	9.9	28.5
50	杯B	3号窯	窯体	第1層	16.6	3.2	10.85	19.3
51	杯A	3号窯	窯体	第1層	12	3.4	9	28.3
52	杯A	3号窯	窯体	第1層	13.55	3	8.35	22.1
53	杯A	3号窯	窯体	第2層	13	3.9	8.9	30
54	杯A	3号窯	窯体	第1層	10.75	3.35	7.35	31.2
55	壺	3号窯	窯体	第1層		12.1	9.6	
56	杯身	3号窯		表土	11.1	3.9		35.1
57	杯B蓋	3号窯		表土	16.85	2.75		16.3
58	杯B蓋	3号窯		表土	15.45	4.35	12.7	28.2
59	杯B蓋	3号窯		表土	14	3.25	12.9	23.2
60	杯B蓋	3号窯		疊層(土石流)	14.2	2.75		19.4
61	杯B蓋	3号窯		表土	14.1	2.5		17.7
62	杯B蓋	3号窯		表土	13.4	2.45		18.3
63	杯B蓋	3号窯		表土	15.5	1.1	12.35	7.1
64	杯B蓋	3号窯		疊層(土石流)	13.4	4.2		31.3
65	杯B蓋	3号窯		表土	11.2	1.9	10.5	17
66	杯B蓋	3号窯		表土	11.25	1.5	10.5	13.3
67	杯B蓋	3号窯		表土	10.5	1.75	10.9	16.7
68	杯B	3号窯		表土	17.6	4	12.9	22.7
69	杯B	3号窯		表土	15.6	3.25	10.6	20.8
70	杯B	3号窯		表土	14	4.3	9.3	30.7
71	杯B	3号窯		表土	13.6	3.9	8.6	28.7
72	杯A	3号窯		表土	12.3	3.8		30.9
73	杯A	3号窯		表土	12.7	3.1		24.4
74	杯A	3号窯		表土	12.3	3.9		31.7
75	杯A	3号窯		表土	11.4	3.5		30.7
76	杯A	3号窯		表土	10.8	3.9		36.1
77	短頸壺	3号窯		表土	6.8	5.55		
78	甕	3号窯		表土		4.5		
79	高杯	3号窯		表土		1.8		
M1	寛永通寶	3号窯		表土				

残存率	調 整		ロクロ方向	焼成	挿図	写真 図版
	調整外面	調整内面				
1/2	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	25	7
1/2	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	25	7
1/4	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	25	8
1/4	回転削り、ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	25	8
1/4	削り、回転ナデ	回転ナデ		良好	25	8
1/2	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	やや良好	34	—
2/3	回転削り→ナデ	回転ナデ	時計回り	やや良好	34	—
1/4	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	やや不良	34	8
3/4	回転削り→ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	34	8
1/5	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	良好	34	—
1/3	回転削り→ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	34	—
2/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	34	8
1/2	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	34	8
1/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや良好	34	8
1/2	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	34	8
1/6	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	34	8
1/3	回転ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや不良	34	—
1/2	回転ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや不良	34	8
1/4	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	34	9
1/4	回転ナデ	回転ナデ		やや不良	34	—
1/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	34	—
1/4	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	34	—
1/6	ナデ、タタキ→カキヌ	ナデ	時計回り	やや良好	34	9
口縁部完形	ナデ、格子タタキ	ナデ		良好	34	9
完形	回転削り→ナデ	回転ナデ	時計回り	やや良好	35	9
1/2	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	35	9
2/3	回転ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや良好	35	—
1/2	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	35	9
1/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや良好	35	9
1/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	35	10
1/2	回転ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや不良	35	10
2/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	35	10
2/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	35	10
1/4	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや不良	35	10
1/2	削り、回転ナデ	回転ナデ		良好	35	10
1/8	回転ナデ、削り	回転ナデ		良好	35	11
1/4	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	やや不良	35	—
1/3	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	良好	35	—
1/3	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	不良	35	—
1/2	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	不良	35	10
1/2	回転ナデ、削り	回転ナデ	反時計回り	良好	35	10
1/4	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	やや良好	35	—
1/3	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	良好	35	—
ほぼ完形	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	やや不良	35	10
ほぼ完形	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	良好	35	10
1/4	回転ナデ、削り	回転ナデ	時計回り	良好	35	11
1/2	回転ナデ、削り	回転ナデ	反時計回り	やや良好	35	11
ほぼ完形	回転ナデ	回転ナデ	反時計回り	やや不良	35	11
1/4	回転ナデ	回転ナデ		良好	35	—
1/2	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	不良	35	—
1/2	回転ナデ	回転ナデ		良好	35	—
1/8	回転ナデ	回転ナデ		不良	35	—
1/4	回転ナデ	回転ナデ		やや良好	35	11
3/4	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	やや良好	35	11
1/5	回転ナデ	回転ナデ	反時計回り	良好	35	11
1/3	回転ナデ	回転ナデ	時計回り	良好	35	11
1/2	回転ナデ	回転ナデ		良好	35	11
小破片	回転ナデ	回転ナデ		やや良好	35	11
坏部底部完存	回転ナデ	回転ナデ		不良	35	11
完形					36	—

第4章 まとめ

第1節 稲塚3号窯出土須恵器

器種組成 今回の調査では、コンテナ14箱分の須恵器が出土し、前章ではこのうち58点を図化・報告した。この点数をもとに器種組成をあらわしたのが第37図のグラフである。

図化段階での選別を経ているため、出土量の多い器種は実際の組成よりその比率が小さく、少ないものは大きく評価されてしまう傾向はあるものの、概要を把握することはできると考える。

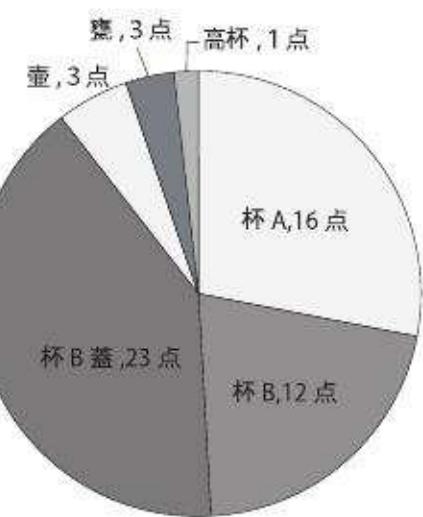
これを見ると、稻塚3号窯出土須恵器の大部分は杯A・杯B・杯B蓋が占めており、壺・甕・高杯は全体の10%程度である。参考までに、図化しなかったものの個体数について、杯A・杯Bを底部計測法、杯B蓋を口縁部計測法でカウントすると、杯Aが14点、杯Bが13点、杯B蓋が16点となる。この数を合わせると、壺・甕・高杯の組成比の合計は全体の5%程度となり、杯A・杯B・杯B蓋が卓越する状態がより鮮明になる。

以上の器種組成から、稻塚3号窯では杯A・杯B・杯B蓋を中心に生産されていたといえよう。

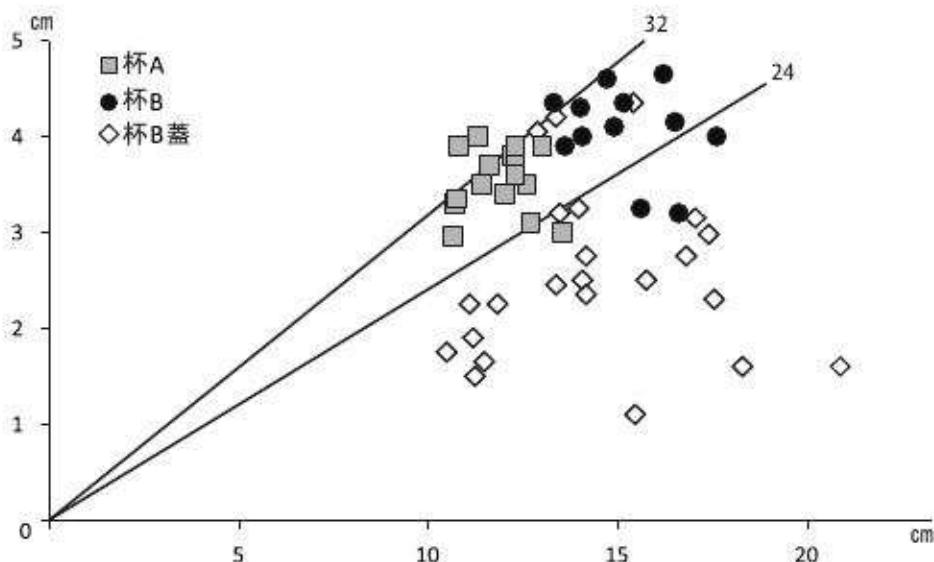
また、本窯については、前章で報告した通り、操業期間がごく短時間であったと考えられる。そこで、次に各形式の特徴を記し、その時期について検討することとする（第38図）。

杯B蓋 天井部が丸みを帯びる笠形で、中央には扁平な宝珠形つまみが付く。口縁部は内湾して端部を丸く收める。回転ナデ仕上げを基調とし、天井部は回転ヘラ削りで仕上げられている。口縁部内面には退化した断面蒲鉾上のかえりを持つものと、かえりの無いものがあり、その比率はおよそ2:1である。

口径は10cm~18cmまで幅広いが、杯Bの口径を下回る10cm~13.5cmにひとつのまとまりがある点について



第37図 稲塚3号窯出土須恵器の器種組成



第38図 出土須恵器の法量比較

は注意を要する。器高については焼け歪みの影響で著しく高いものもあるが、2.0cm前後のものが多い。

杯B 口縁部は外に開いて直線的に立ち上がり、4~7mmの低い高台が貼り付けられている。口径13.5~17.5cm前後、器高3.9~4.6cm前後、径高指数24~32前後である。底部内面~口縁部にかけてナデ調整を基調としている。底部外面はヘラ切り後ヘラ削り調整し、なかにはさらにナデ調整で丁寧に仕上げられるものも一定数みられる。

杯A 口縁部が直線的に立ち上がるものと、内湾して立ち上がるものがある。口径10.7~13.0cm前後、器高3.1cm~3.9cm前後、径高指数24~32前後である。底部はヘラ切りし、ナデ調整で仕上げられるが、底部外面に格子状の削り痕跡がみられるものが一定数ある。

時期 以上の特徴から、稲塚3号窯出土須恵器は飛鳥IV期に位置付けることができる。また、丹波地域では近年東昭吾氏によって鴨庄編年案が提示されている（東 昭吾『兵庫県丹波市所在 鴨庄古窯跡群詳細調査報告書(1) -鴨庄古窯跡群詳細分布調査報告-』東 昭吾編集・発行2016）。本編年は表採資料に基づいているという制約はあるものの、当該地域において不明瞭であった7世紀後半~8世紀の変遷についても示されており、本窯は鴨庄IIb期に相当する。

第2節 稲塚窯跡群の時期

第1章で詳述したとおり、本調査に伴って改めて周辺を踏査した結果、稲塚窯跡群が9基からなる窯跡群である事が明らかになった。また、1号窯・4号窯・5号窯・7号窯・8号窯・9号窯で少量だが新たに遺物を採集し、東 昭吾氏の成果と合わせて図化・報告している（第17・20・21図）。資料数の制約は否めないが、今後の見通しも兼ねて本節では各窯採集遺物の時期について検討し、窯跡群の変遷について概観したい。

1号窯 杯身(1)と壺蓋(2)を表採している。杯身は口径11.0cm前後で、底部~体部にかけて屈曲しつつ口縁部へと緩やかに湾曲して立ち上がり、端部を丸く收める。特徴が乏しいため時期の限定は難しいが、鴨庄IIa期~IIb期に相当概当すると考えられる。

4号窯 杯H(4・5)・杯H蓋(3)・高杯(6)を表採している。

3は口縁部付近しか残っていないが、丸みを帯びて天井部から口縁部に至る。4は口径11.7cm、器高3.1cmで底部から体部が丸みを帯びて立ち上がり、退化した受け部と短い立ち上がりを持つ。5は口径13.4cm、器高4.3cmで4よりも一回り大きい。器形も底部と体部の境を屈曲させ、

体部は直線的に立ち上がり、退化した受け部と短い立ち上がりを持つ。3・4については鴨庄Ia期、5については鴨庄Ib期の特徴を持っていることから、4号窯については多少の時期幅が想定される。

5号窯 杯B蓋(7~10)・杯B(11)・杯H(14)・壺(15・16)・高杯(17)を表採している。

		Ia期	Ib期	IIa期	IIb期
1号窯				■	■
2号窯					
3号窯					■
4号窯		■	■		
5号窯			■	■	
6号窯					
7号窯			■		
8号窯			■		
9号窯	■				

第39図 稲塚窯跡群の変遷

杯B蓋は丸みを帯びた形態で、口縁部内面に身受けのかえりを有している。かえりの形状は7が断面蒲鉾状、8は先端が尖る断面三角形である。14は底部と体部の境を屈曲させる杯Hである。これらの資料から5号窯は鴨庄I b期～II a期に位置付けられる。

7号窯　杯G蓋(18)を表採している。丸みを帯びた口縁部片で、身受けのかえりを有しているがその先端は口縁端部とはほぼ等しい。鴨庄I b期に位置付けられる。

8号窯　杯H(19)を表採している。鴨庄I b期に位置付けられる。

9号窯　杯身(20)を表採している。口径11.1cm、器高4.6cm、底部～体部は丸みを帯び、口縁部は外反しつつ立ち上がり、口縁端面は明確ではない。MT15型式に併行する。

窯跡群の変遷　検討の結果、2号窯と6号窯については時期不明であるものの、その他の窯跡の時期的変遷については大まかな見通しを得ることができた(第39図)。

まず、MT15併行期に東側の谷に所在する9号窯で杯などの生産がはじまるが、継続することなく途絶えるものと考えられる。その後、鴨庄I a期に西側の谷に所在する4号窯がつくられる。I b期には4号窯の他に東側の谷において近接して位置する5号窯・7号窯・8号窯が該当し、谷の東西で須恵器生産が行われるようになる。II a期に数は減少するものの、谷の東西での窯の分布は続き、1号窯と5号窯が該当する。そして、II b期には谷西側の窯はなくなり、東(1号窯)と中央(3号窯)になる。

以上の時期的変遷はわずかな表採資料をもとにしているため、詳細な内容についてはなお資料の増加を待って検討しなければならないところであるが、あえて積極的に位置づけを試みた。この結果、稻塚窯跡群は主に鴨庄I a期～II b期に操業され、今回調査した3号窯はその最終段階に営まれたことは見通しとして提示できよう。

供給先　稻塚窯跡群の操業期間に併行する遺跡として、南東に約3kmに所在する七日市遺跡がある。「七日市I期」はTK47型式～MT215型式の須恵器で、9号窯及び4・5・7・8号窯の操業期間(MT15及び鴨庄I a期～I b期)に相当する。また、「七日市II期」は鴨庄II a～II b期に当たり、1・3・5号窯と時期的に併行する。したがって、七日市遺跡は稻塚窯跡群で生産された須恵器の全時期を通じた有力な供給先の一つと考えられる。

第3節　総括

最後に、今回の調査成果について列挙してまとめとする。

- ①稻塚窯跡群は黒井川左岸の千丈寺山の南側裾部の谷内に立地する9基からなる窯跡群である。このうち、谷の最も奥に所在する稻塚3号窯を調査した。
- ②調査の結果、7世紀後半の窯跡1基と須恵器が明らかとなっている。
- ③窯跡について、焚口・前庭部及び灰原は地滑りとその後の谷の開析作用によって失われていた。
- ④窯体床面は1面のみで、焼結の程度は極めて弱い。また、補修痕跡も認められなかったことから、操業は短期間であると考えられる。
- ⑤稻塚窯跡群1号窯～8号窯は鴨庄I a期～II b期の間に谷の東西で操業しているが、稻塚3号窯はこの最終段階に該当する。この期間に併行する遺跡として近隣の七日市遺跡があり、当窯跡群で生産された須恵器の供給先の一つと考えられる。

報 告 書 抄 錄

写 真 図 版

写真図版 1 遺跡



遺跡遠景 南西から（左側山頂が千丈寺山・右側山頂が黒井城）



稻塚3号窯跡遠景 西から（奥側の山頂が黒井城）

写真図版2 稲塚3号窯跡



調査前全景 西から

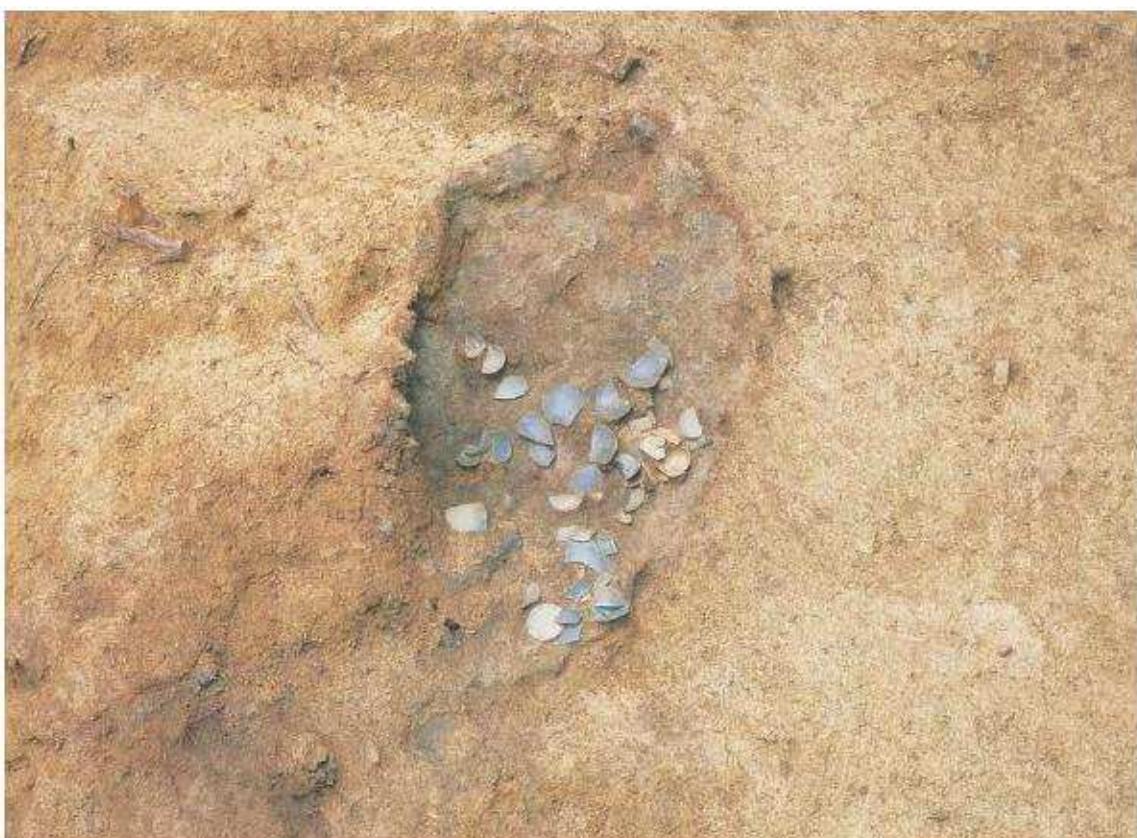


全景 北西から

写真図版3 稲塚3号窯跡

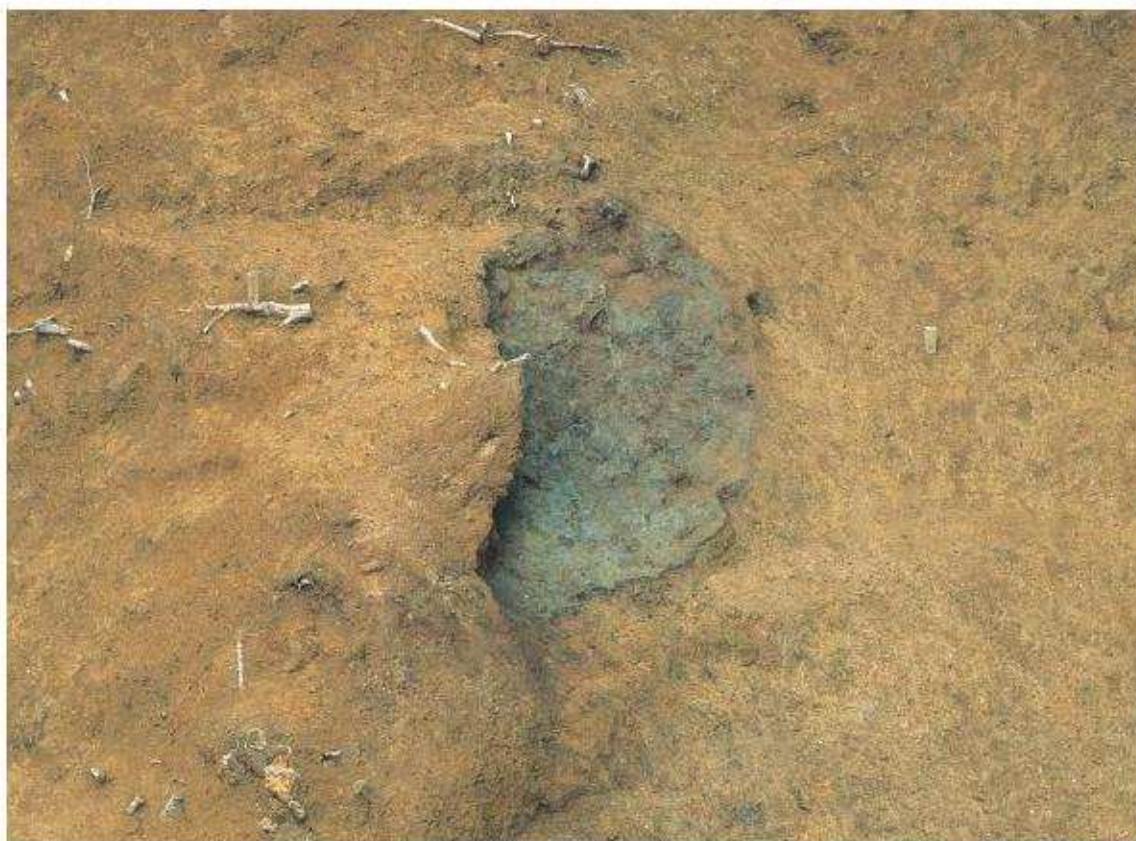


全景 南西から



窯体内遺物出土状況 西から

写真図版4 稲塚3号窯跡



窯体全景 西から



窯体全景 南から

写真図版5 稲塚3号窯跡



窯体断面 西から



窯体断面 西から

写真図版 6 出土遺物



稻塚 3 号窯跡出土遺物

写真図版7 出土遺物



3・4：稻塚4号窯表採土器 8・14～16：稻塚5号窯表採土器 18：稻塚7号窯表採土器
19：稻塚8号窯表採土器 20：稻塚9号窯表採土器 21・22：確認調査出土土器

写真図版8 出土遺物



23~25：確認調査出土土器 28・29・32~36・38：3号窯 窯体内出土土器

写真図版9 出土遺物



39・43～46・48・49：3号窯 窯体内出土土器

写真図版10 出土遺物



50~55：3号窯 窯体内出土土器 60・61・64・65：3号窯 表土層出土土器

写真図版11 出土遺物



56・66~68・73~79：3号窯 表土層出土土器

兵庫県文化財調査報告 第505冊
丹波市

稻塚3号窯跡

-(砂)稻塚川 災害関連緊急砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

平成31(2019)年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：デジタルグラフィック㈱
〒650-0043 神戸市中央区弁天町1-1
